
知られざる世界の旅人

たつたまごっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知られざる世界の旅人

【Nコード】

N8398X

【作者名】

たつたまごっち

【あらすじ】

え？テンプレ？転生ですか・・・やっぱり一つの世界じゃ満足できねえ！少しマイナーなチート？（道具）を貰いさまざまな世界を旅する物語です。

旅の始まり（前書き）

自称ドクター（偽）が世界をめぐる旅です。処女作、最強要素、原作破壊、ご都合主義がダメな方はお引き返しねがいます。更新は不定期です。

旅の始まり

さあ、みなさん死ぬとはどんな感じなんだろうか？

僕はついさっき体験したからわかるけれど生きているみなさんはどう考えているんだろうかな？

まあ、世間では走馬灯が見えるとか三途の川を渡る、他には永遠の闇だとか言われているけれど

本当は違う。なぜなら今俺がいるのは真っ白くて何も無い空間、奥行きも高さもないただ白だけの空間。

俺は死んだ……

まあ、テンプレのように子供を助けたとかじゃないけど、道を歩いていると

急に、なんか某隙間妖怪さんのようなスキマに吸い込まれたわけだが死んだ感覚というか自分が消えていく感覚があったから死んだと思うんだけど

「じゃあ俺は今どこにいるんだ？」

「ここはボイドとか虚数空間とか外の世界では呼ばれていますね」と声がする方に振り向くと

「こんにちわ、○○○○さん」

青髪の美女がこちらを見ながら微笑んでいた。

「え？」

俺はフリーズした……

「おーいーすーいーまーせん」

「……………」

「返事してくれませんか？」

10分後……

「おーい（泣）」

「うわ！？どうしたの？」

いったいなんだっていうんだ？

「私の話を聞いてくれますか？」

涙目で訴えてくるので……

「だが断る」

「何ですか」（泣）」

「俺の一番好きなことは相手が期待したときに一気にどん底まで落とすことだ。」

でも、さすがに聞かないと此処から出れなさそうだからな。

「そんな」

「で、いったいどうして俺はここにいるんだ。」

「はい！単刀直入に言います。あなたは消えました。」

「え？死んだとかじゃないの？」

こういうのって間違えて死にましたとかじゃ？

「死んだといっても過言ではありませんが本質的には時空間の裂け目に落ちました。」

「時空間の裂け目？」

そんなドクター・誰的なものがあるのか？

「そーですね。世界の歪みたいなのですよ。
前にこの世界で起きたのは大体6550万年ぐらい前だったはずですね。」

6550万年前って恐竜の絶滅したときじゃねえか、そんなのが起きて地上は大丈夫なのか？

「今回の規模も小さかったので被害は最小限！つまりはあなた一人だけですな。」

俺一人だけか・・・って俺の心読まれてね？

「ええまあ、一応世界の管理者やってますから（キリッ）」

「格好つけても仕方ありませんよ。」

「そんなことわかっています！！といいますかそんなことうでもいいんですよ！これからのことを決めましょう」

これから？俺は消えたんならこのまま存在も意思もすべてが消えるんじゃない？

「そんなことすればその世界とそれに準する並行世界数千個が一瞬にして塵へと変わりますよ。」

え？何それ怖い……

「すべての世界での命の総数は決まっています。一つでも減れば莫大なエネルギーが生まれすべての世界が消滅するということですよ。そーなのか！

「ここからはよくあるテンプレと同じく少しですが願いを叶えましょう。そうですね、数は4つですかね？一つにつきオプションもつけましょう。こんなところですかね？」

「基本的に何を頼んでもいいの？」

何でもは無理でしょ？だってよくチートオリ主が使うような世界を破壊する力とか創造とかやばくね？

「そうですね？神にしてくれとか命の創造とかは無理ですね。」
じゃあ基本的のなんでもいけるのか……

「じゃあ一つ目にめだかボックスの日之影空洞の「知られざる英雄」
《ミスターアンノウン》とそれに見合うだけの戦闘能力を」
ぶっちゃけめだかの完成とかよりかつこよくない？

「それは良いのですが、本物と比べると戦闘能力が落ちます。ですから、知られざる英雄とはその強大な強さから目をそらすというもののなので忘れていく能力は本物よりも1段階も2段階も下がります
がそれでも良いのですか？」

「うーん、ではそれで」

じゃあ次は子供の時からの夢を叶えよう。

「ドクター・フリーに出てくる次元超越時空移動装置を世界を渡る能力を付けてそして俺でも弄れる様に簡略化しておいてくれね？」
子供のころからこれに乗りたかったんだよね！

「えーと、簡略化はいいんですが世界を渡る能力は例えば物語の世界に行っただとしてもそれはパラレルワールドにしかありません。本当の物語の世界は封印されており誰も外から干渉できません。まあ、パラレルワールドと言っても99・9999%同じですけどそしてむやみやたらと歴史をかいへんしないでくださいね。下手をして世界が壊れては困りますから」
すっげー！ほとんど叶っちゃった。後二つはと……

「3つめは十二の試練ゴッドハンドをお願いしたい。」
fateで一番好きなサーヴァントの宝具だしね。

「え？ターデイスとくれば種族をタイムロードにしてくれとかじゃないんですか？」

あんたタイムロード知ってたんだね。

「そりゃ〜ね〜本物と友達ですしね。」
え？

「まあ、そんなことはどうでもいいんです。じゃあなんで十二の試^{ハンド}練を？」

「タイムロードだと再生するたびに顔や体が変わるだろ？それが世界を移動している間になればまた前の世界に戻った時に不便だからね似たようなのを思い出してみたらこんなのがあつたからね。これを選んだんだ。」

「では、十二の試練^{十二の試練}をつけますが貴方は本当の担い手ではないので、Bランク以下の攻撃を無効にするという効果がなくなってしまう。それに、再生のほうも本物の担い手のようには行かないですね。ドクターが再生するときと変わらないと思いますよ。」

「別に構わない。それで頼む。」

「わかりました。次が最後ですがどうしますか？」

「じゃあ、最後は知識を、すべての世界とは言わないが俺が持ち得るだけの知識を頼む。」

「わかりました。能力やら知識などはこの空間から離れた瞬間に付加されますので知識の時は寝ていた方がいいですよ。」
これで世界で迷うこともないだろう。

「はい！ターデイスに付加完了しましたよ。え〜とターデイスの形

はどうしますか？カメレオン回路は壊れていませんから行った先で形を変えますか？それとも今ここで固定しておきますか？」

うーんどうしようかな？でもやっぱり！

「あのポリスボックスをお願いします。」

ターデイス（改）とはいえやっぱりターデイスはあの形じゃないとね（キリッ）

何もない空間が光り始める。そしてあのターデイス独特のエンジン音が鳴り響き・・・何もない空間にあのポリスボックスが現れた。

「これで要求はすべて満たされましたがあとなにかありますか？」
うーん、あ！いいこと考えた。

「じゃあ最後のオプションの追加だ。ここにもターデイスで来られるようにしてくれるか？」

「なぜかだけ聞いてもいいですか？」
と心底不思議そうに聞いてくる。

「いや、また君に会いに来るとそれと旅の始まりの場所だからね。いつでも来られるようにしておきたいのさ。」

「わかりました。……………これでターデイスは要求道理ですよ？では最後に容姿などの設定に行きましょうか」
容姿か？何がいいかな……………

「容姿は上の下ぐらいので頼むもちろん性別は男で年は24歳ぐらいからにしておいてくれ。」

「了解しました」

せつせと幼女が作業している間俺はどの世界に行くかを考えていた・
・・・・

「作業完了しましたよ！ではいつてらっしやいませ楽しい世界の旅を！いつでも戻ってきてくださいね」

笑顔で見送ってくれる。

「あ、最後に私の名前はアテネです。おぼえておいてくださいね。」
そんな有名な人だったんだ・・・・ま、関係ないけどね・・・・

「また来るからまたね」

というターデイスの中に入る・・・・・

中は第9代目ドクターの時のターデイスとほとんど同じ少し違うのはモニターだけですべて操作できることだけだ。

ドクターのように操ることはできないしな、あのボタンの中には自爆スイッチもあるみたいだしね

そしてターデイスは何もない空間から独特のエンジン音を鳴らしこの空間から消えていく・・・・・

アテネ side

「あんな奴君以外は初めてよドクター？」

アテネが尋ねる人物こそかの有名なドクター本人である。

彼の世界に管理者はいないそのため代わりに管理者代行として時空を回っているのだ。

「ああ、そうかもな。実にファンタスティックだ！」
ドクターがふざけたように言う。

「まあ、ファンタスティックかはおいておいても彼は世界のためになるわ」

「後は彼次第かな」

「ええ、もう行くの？」

「ああ、もう行かないと……ではまた」

「また会いましょう」

こちらもさっきと同じようにで違うエンジン音を鳴らしながらターデイスは消えていく……

「後は精々楽しませてもらいませよ！」

そう言いアテネはこの空間から消える。

誰もいなくなった空間

そして物語はこの空間から始まる……………

次回に続く！

旅の始まり（後書き）

こんなもんですが今後も見ていただけると嬉しいです。

ただターデイスを使って世界を回るのが見たかったです（笑）

追記 少し表現がわかりにくかったのを修正したのと知られざる英雄の効果が薄い理由を明確に致しました。

ターデイスの中そして初めての世界

アテネと別れた後俺は本物のターデイスに感動しているいて気づかなかったがコンソールの上に手紙があった。

「なんなんだこれは」

と手紙を開けるとそこには

『○○○ ○○さんへ

先ほどぶりですが、こんにちわ。この手紙にはさつき説明できていなかった部分を書いてありますのでよく読んでおいてくださいね。

では、まずあなたの前の名前は使えません。

言葉には言霊が宿るという言葉の通り、名前にはそれこそ人を縛るほどの力があります。ですから新しい名前はよく考えて決めてくださいね。

2つ目にこの舟、少しターデイスとは違いますが、ここではターデイスとしておきます。このターデイスは地下7階まであります。

地下には上から、居住区、食糧、服、武器庫、図書館、演習場、そして最後のフロアは好きなものに変えられますので好きに変えてくださいね。

最後にこのターデイスですが少し改造したときに不具合が出てしまい艦魂とでも言いましょうか、ターデイスの意志が人の形となって

存在しているようですので見つけたら話してあげてくださいね。

それでは楽しい旅を

り
』

アテネよ

「じゃあ

ギューーン！ギューーン！

白い空間に現れるターデイス

「あれ？ずいぶん早いわね？いや、あつちはまだ結構な時間経っているのかしら。」

「アテネ！エクストラポレーター調整をしてくれない？」

「何で？別に使わなくても旅自体はできるんじゃないの？」

「いや、エクストラポレーター自体はそれほど重要じゃないんだ。それで発生させられるフォースフィールドが必要になるかと思って。」

「あれはダーレクのミサイルでも効かず宇宙規模の大爆発でも効かないという優れたものだからな」

「来るのはわかってたけど、こんなに早いとはね。ここで調整すれば10分で済むわ、ここでお茶でも飲んでいきなさい。」

「いい何もないところをつかんだと思うとちやぶ台とお茶を出す。湯気まで出てるぞ。」

「この舟借りるわね」

と言いつターデイスに入っていくアテネ・・・やっぱり小さいな・・・

・

「あゝおいし」

10分経過

「調整終わったわよ。メインモニターから動かせるから、じゃあ、
いつてらっしゃい」

簡単にしたもんだな。やっぱり管理者は伊達じゃないということか。

「ありがと、いつてきます。」

ギューーン！ギューーン！

何処かの世界の宇宙に出る。

そろそろ初めの目的地を見つけようかな・・・..
いつまでも宇宙空間に漂っている訳には行かないしね・・・

「では、初めは「東方p『ガタツン』」！？なんで勝手に止まった
？・・・」

まあ、旅は長いんだ東方の世界はまた今度にしよう！

「この世界は『涼宮ハルヒの世界』だ。」

やっぱり俺が異世界人のポジションなのかな？

ってこの世界についたと思ったならなぜターデイスの中に長門とキョ
ンが？

あ、そうかこの座標・・・・・・・・

「情報結合の解除を申請す・・・・・・・・る？」

かの有名なヒューマノイドインターフェイス長門有希と朝倉の戦い
の真っ最中の封鎖空間に入っちゃったみたいだな・・・・・・・・

どうしよう？

キョ
ン
s
i
d
e

俺は朝倉に放課後呼び出され殺されかけた・・・・・・・・マジで死ぬ5秒
前だと思っていたとき長門が助けに来た。

長門と朝倉の宇宙的戦闘を真近で見そして長門が鉄の棒に刺された
と思った瞬間・・・・・・・・

独特のエンジン音が鳴り響き鉄の棒の前に昔何かで見たことがある
特徴的なポリボックスが俺と長門を巻き込み現れた。

今度はなんなんだよ・・・・・・・・もう勘弁してくれ、やれやれ

s
i
d
e
o
u
t

ターデイスの中そして初めての世界（後書き）

二話目です少し強引ですが勘弁してくださいね
感想お待ちしております！

追記 少し書き方を修正いたしました。

初の戦闘

おいおい世界についたと思ったたらすぐに戦闘開始ってか？
まあ、いいまずこいつらに話を

「おい、誰もいないのか？」
キヨンが言う。

おいおい俺がいるじゃねえかってそうか「知られざる英雄」《ミス
ターアンノウン》のせいで存在感がない、いやありすぎて無意識的
に目をそらしているのか？おっと、長門は気が付いたようだな！そ
の証拠に長門はその透き通るような目をこちらに固定しているしな

「うお！なんだお前？」
声を張り上げるな……

「そっちこそなんだ俺の船に勝手に入りやがって」
こっちはなにも知らないふりをしておかないと、そうしないと怪
しまれてしまうからな……

「すまんが何が起こったか俺には分からん！宇宙で「あなたは少し
黙っていて」

長門がキヨンの話すのを遮る。

「ここは何？あの空間は朝倉涼子が封鎖していたはず何も入れない。
どうやって入ったの？」

「質問をする前に君たちは何なんだ？まず、名前を覚えてもらいた

い」

「長門有希」「××× ××だ。」

「え？なんだって？そちらの男の方が聞き取れなかった。もう一度頼む」

なぜ聞き取れないんだ？キヨンの方だけだ
日本語をしゃべっているのか？50億の言語を自動翻訳するターデイスですら翻訳は無理だというのか！

「××× ××だ。」

もう無理・・・人間諦めが肝心だな！

「あだ名を教えてくれ」

「な、なんで？」

「彼ではあなたの名前を聞き取ることは不可能、強力な情報防壁がある。私でも解くのに1億年以上かかる。」

長門が驚愕の事実を言う。もしかしたらキヨンの名前がこの世界の根底にかかわっているハルヒに何らかの影響を及ぼすのかもな

「はあ、自分の名前も言えないとは・・・キヨンだ。みんなからはそう呼ばれている。」
だるそうにキヨンが言う。

「俺の名はドクター」

「ドクター何？」

あつ、あつぱりそうなるか

「只のドクター誰でも無くなんでもないドクターだ。」

「いいや、ドクターとやらお前はいつたいなんなんだ？」

「俺はこの世界ん定義で言うなら異世界人で超能力者だ。」
「俺はこの世界ん定義で言うなら異世界人で超能力者だ。」
「俺は異常だけどこの世界じゃ変わりもないだろ。」

「で？何をしにこの世界に？>ガ、ガッタン<！？」
「この衝撃は？」

「外にいる朝倉涼子の攻撃、ここも危ない」

「ここが只の閉鎖されているだけの空間だったらな。ここはターデイス僕のターデイスだ。世界、そして時空間を旅するんだ。情報操作ごときではやられないよ」

「なあ、長門どうする？」

「一旦体制を立て直してからもう一度戦う」
「長門たちが何か喋っている間に俺はフォースフィールドの設定を完了させ作動させる。」

「やつぱり、おまえらは卑屈だね？まずこういうのは、話し合ってみるんだよ！」
「いい俺は勢いよくターデイスのドアを開ける。」

「おい、ま、ま」

最後まで言い終わるまでにはもうドアを開けていた。

「あら、あなたがこのヘンテコな青い箱をこの空間に運んだ張本人ね？別にどうでもいいわ、あなたごと消してあげるわ。」
と朝倉は鉄の棒を某英雄王の王の財宝ゲートオブヒーロンのように打ち出すが

キン！カキン！バキ！

といったように俺の前の透明な壁に遮られ俺には1つも傷をつけない。

「それだけか？無駄だね。ポイントゼロ、フォースフィールドがすべて跳ね返す。で？どうする？」

「それなら、接近戦を挑むだけよ。」

そう言い朝倉はナイフを持ち高速で迫るが

「接近戦で俺に挑むとは笑い話にもならないな。俺は軍隊と一人で戦えるんだぞ？」

そついい朝倉の腕をつかみ投げ捨てる。

「おい、長門とやらもう時間は稼いだだろ？」

「情報連結解除開始……」

そう、長門が言い始めるとターデイスを除いてすべての机や椅子そして朝倉の体が消えていく……

「あゝあ残念所詮私はバックアップだったかあ」

「硬直状態を何とかするいいチャンスだと思っただのにな」

「変な乱入がなかったら達成できたのかな？でももう言っても後の

祭りね。これをあなたたち人間は後悔って言うのかな。」

「私の負け 良かったね延命できてでも気を付けてね、統合思念体は。」

と原作と同じ言葉を朝倉は紡ぐ

「最後にあなたは誰？」

「ドクターだ。ただのドクター。」
正直名前はないしな

「じゃあね、涼宮さんとお幸せに……………」
朝倉は完全に消滅した。

「教室を再構成する。」
言ったそばから教室が再構成される。

「で、どうする？まずは何処かへ行こうか。さあ、入れ」
そうして、二人はターデイスに入り

「君の家に行こうか？座標を」
そして長門が映画の時のように腕へ座標を渡す。

へえ、てか何でわかるんだろう。ご都合主義ってやつだろう。
ボタンを押し教室からターデイスが消えていくとき

「WAWAWA忘れ物」
ゲ！谷口だ、忘れてた……………」

ギューーン！ギューーン！とポリスボックスが消えていくのを

「うお、ナンナンドー」

谷口が目撃した……

まあ、谷口だしいや

あの三年前に行ったときの部屋にターデイスが現れ『ガガガガッガ
ガガ』あ……天井が……やべええええええええ

初の戦闘（後書き）

ご覧ありがとうございます。

フォースフィールドってスタートレックとかのと同じですよね？
次回詳しい自己紹介を

自己紹介！

さあ、長門の家についたわけだがどうしようかな……。あの音は確実に屋根潰したしな、長門に後でどうするか聞こう。

ガチャ

「ここは？」

キヨンが呆けたように聞く

「ここは長門の家だ。」

ここがああ長門の家か……。感激だな。

「そう。ここは私の家」

「まず、あなたは何？こんな技術この時代にはない。世界を移動するなんて情報統合思念体にもできない。そしてI.T.T.Fを圧倒する戦闘技術あなたは人間？」

長門がマシンガンのように質問してくる。

「まあまあまず座ってもいいかい？」

「どうぞ」

とあの何もない部屋に座る。

「で、ドクターとやらなぜここにきた？」

「ここに来る気はなかった。違う世界に行こうとしていた。その世界は魔法や妖怪などがいるような世界だ、だがターデイスを作動さ

せた途端トランスマツトビームいやそんなレベルじゃない、謎の何かに包まれた。気づいた時にはこの世界だ。長門よなぜだ？なぜ俺はこの世界に来させられた？」
大体検討はついているんだけどな。

「おそらく涼宮ハルヒがここにあなたを此処に呼んだ。あなたが現れる少し前涼宮ハルヒから膨大な情報フレアが観測された。それがあなたとこの移動装置を此处へと呼び寄せた。それがあなたがここにいる理由。」

「だからターデイスがこの時間軸に固定されているのか、つまり俺はここから動けないと・・・」

「そう」

「どうしようかな？でも、少しターデイスを調整すればいいだろ。無理でもあの白い空間はすべての世界の上位世界だから移動は関係ないしな。」

「じゃあ、詳しい俺の説明をしようか。」

「あなたは何？」

「俺はさっき説明した通り異世界人で超能力者だ。」

「じゃあ、あんたはどんな超能力が使えるんだ？」

「キョンが聞いてくる。そういやここまでキョンは空気だったな・・・」

「具体的に言えば俺のは超能力というよりは少し違う。これはある世界での「異常」《アブノーマル》と呼ばれる力だ。それに俺の「

テレポート」やら「サイキック」なんて言うわかり易いものじゃない。「知られざる英雄」《ミスターアンノウン》と呼ばれ誰も俺を目視することができず覚えても置くこともできない。」

「それは存在を認識できないという異常アブノーマルということなのか？」

「結果はそうだが過程が違う。これは俺の強大さに目を逸らした結果だ。あ、勘違いするなよ俺様とか言ったりするような強大さじゃない単純な強さの副作用みたいなもんだからなだからこそ長門のように人間と違う存在には効かないし俺よりも存在が強大な存在には効果がない。まあ、そんな存在は神様が悪魔とかまず人間じゃないなぜなら俺は一人で軍隊と戦えるからな。」

「な………」

キョンが絶句する。普通一人で軍隊と戦えるなんてアニメや漫画の中にしかないからな

「じゃ、今日のお話はここまでさあキョンは家に帰った！帰った！と無理やり家に追い返す。」

「長門も帰った方がいいと思うよな？」

「思う。」

「てなわけで、さようなら」

ガチャと音が鳴り長門の家から追い出す。

「さて、話すことがある。キョンは気づいていなかったようだがな。や、屋根がぶつ壊れてる。何でもする許してくれ……………」
「
と言いつつ土下座する。」

「別にいい。後で直しておく。」
おお、長門が寛大でよかった。

「あと一つ少しここ借りてもいかな？住む場所がないんだ。町にこんな古びたポリスボックスが在ったらへたすりゃ撤去されちまう。」

「いい、この部屋をつかって」

と言い、部屋を貸してくれる。長門感謝だな。よし、ここでやりたかったことがあるんだよな。明日までに準備しないとな……キヨンの驚く姿が目に見えかぶぜ！

キヨンSIDE

今日はいろんなことがありすぎだ。朝倉が殺しにかかってきたり、えーと誰だっけあの男は？だれか忘れたが謎の男が青い箱に乗って現れ朝倉と戦い長門が朝倉を消した。文字道理消したんだ。もう今日は疲れた、寝よう……

『翌日』

今日も始まりあの長門《宇宙人》がいるであろう学校へ向かい……

「ねえキヨン！新しい先生が来るらしいわ、入学してからすぐよおかしいとは思わない？」

そう、我らがSOS団団長涼宮ハルヒだ。昨日ここで自分が望み探している宇宙人の戦いがあったとも知らずに新しく来たという先生に夢中だ。なぜこう近くのことには気付かないんだろうな？

「その先生は物理の先生らしいわ！ねえ、聞いているの？キヨン！キヨン！」

と肩をガンガン脳震盪でも起こしそうなくらいな強さで揺すつてくるので

「聞いているよ。そんなに騒ぐことでもないだろ？都合が変わっただけだろ？それに今日はちょうど一時間目が物理だからな。それで判断してみろよ。」

「あんたに言われなくても、そうするわ！どんな奴か気になるわね！」

別に俺は気にならないよ……

キンコンカンコン

ほら、岡部のホームルームが終わったぞ。何か岡部の話だと先生は男で24歳アメリカで大学を飛び級してるらしいな。何でこんな学校に来たんだ？どこかの大学やら研究室からの誘いぐらいあっただろうに。

すぐにその疑問は解決されることになる。

「あれ？先生遅いわね。もうチャイムなっから3分ぐらいたってるわよ？」

ハルヒが尋ねると

「もう来てるぞ」

と教卓から音がすると

「うお！」と谷口が声を上げる。そして生徒がそこに目を向けると

「さあ、物理の時間だ！」

お、お前は昨日の！何で！ここに！？

SIDE OUT

自己紹介！（後書き）

主人公を話に絡ませようとするとこうなりました。

でもドクターが使ってたジョン・スミスは使えないしな
名前どうしよう・・・

感想受け付けてます！

俺の職業

「みなさん今日も元気かな？俺の名前は日之影空洞だ。」

と言いながらカクカクと音を立てながらチョークで黒板に名前を書いていく。偽名は迷ったがジョンスミスはやるとやばいのでやめ、そうなるこれぐらいだろう。日本人顔なのにヘラクレスはないしな。英雄の名前は使いたくない。めだかの世界では考え物だな。

「学校で教えるのは初めてだからおかしな点があるかもしれないがここところは頼む。」

「じゃあ、授業を始めよう。まず、俺が物理を専攻した理由だが昔俺は宇宙人やタイムマシンやらにあこがれてたからだが今でも信じてはいる。まあいいこんな昔話しても仕方がないので授業を始めようか。じゃあ、教科書１・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

キンコンカコンコン

てなわけで一時間目は終了だな。

「最後に何処かの部活の顧問をしたいと思っっているから何かおすめがあれば廊下にいるときでも捕まえてくれ。じゃあ、今日の授業はここで終了！」

そして、終わると同時にハルヒが全速力で走ってくる。

「先生！私のクラブの顧問をしてください！」

SOS団に顧問要るのか？鶴屋さんは名誉顧問じゃないのか？

「いいがどんなクラブなんだ？」

「宇宙人や未来人などを探し出して一緒に遊ぶクラブです！」
初めの言葉で大丈夫だと感じたな。

「面白そうじゃないか。放課後どこに行けばいい？」

「文芸部の部室へ。」

「わかった。放課後になり次第そちらへむかわせてもらおう。」
後ろでキヨンがものすごい呆れてるがどうしようかな？ま、キヨンはいいや。

「では、放課後に」

「あ、今度から素で話せよ。」
と耳元で言う。

「！？」

一瞬びつくりしたようにしジト目でこちらを見てくるが無視する。

ハルヒSIDE

やっぱり見込んだ通りだったわ。来ているのに誰も気づかないなんてありえないわ。いくら空気が薄いからと言ってこれはありえない、何かの力に違いはないわ。それに一発で私が猫かぶってるって気づいたしあなたの正体を暴いて見せるわ！

「おい、聞いているのか？」

キヨンが聞いてくるが

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい！」

「うるさいわね！いまあの先生をどうやってSOS団専属の監督にしようか考えてるの、邪魔したら罰金よ。」

「へいへい」

待つてなさい日之影空洞！

SIDE OUT

キングクリムゾン！

過程が消し飛び結果だけが残る！

そして放課後だ。今あの文芸部室の前にいる何か感動のようなものを覚えるな。そうして「失礼しま〜」・・・・・・・・・・「あ、きゃあああああああああああああ！」バチイン

「すみません。日之影先生」

「いやでも着替えのぞかれたら誰でもこうなりますってこちらこそすみません。」

「涼宮さんと呼ばれてきたんですか？じゃあ、お茶入れますね。」

着替えを覗いてしまった。なぜか「知られざる英雄」《ミスターア
ンノウ》も効かなかった。ギャグ補正か乙女の補正かどちらにせ
よ怖いね。でも、有名な文芸部室で朝比奈さんのお茶が飲めるなん
て感激だな。

「はい、おまたせしました。」

フッフ「俺の猫舌なんで。」

「そーなのか」

とたわいもない話を朝比奈さんとしていると

ガチャ

「朝比奈さんだけってあなたもいるのか。日之影先生いやドクター
と呼んだ方がいいか？」

キヨンが言う

「ここでは一応日之影と言っておいてくれ。ハルヒにばれるの面倒
だ。」

「わかった。」

「？」

朝比奈さんだけが訳が分からなさうにしているがそんな仕草も可愛
いですね。さつきもそのたわわと実「バシイ」

「あれ朝比奈さん何を？」

「すみません。失礼なこと考えられたような気がしたので勘違いで

したらすみません。日之影先生」

怖い朝比奈さんこんな朝比奈さんはゴトウー（ry

「長門は？」

「今日は休みらしいぞ。昨日あんなに戦ってたしな。疲れてるんじゃない？」

今日の長門

「これどうしよう」

屋根と戦っていた。

閑話休題

「で？あなたは此処の顧問をやるつもりで？」
あきれた様子で聞いてくるが

「ああ、もちろん」

「はあ、やれやれ」

ガチャ

「遅れてすみません。」
と言いつつ古泉がやってくる。

「こんにちわ。古泉くん」

「はい？ああ、あなたは今日赴任してきた日之影先生ですね。こちらこそよろしく願います。ですがなぜここに？」
「言いつつもこちらが何者が探っているようだな。」

「涼宮に此処の顧問をやってほしいと言われてな。」

ガチャ

「ごつめ〜ん！遅れたわ。日之影先生これでいいわね？」

「ああ、これからもそうしてくれ、それにここじゃあ空洞でいい。」

「じゃあ、空洞、何かこの部活に質問はある？」

「何をするかは聞いたから部員は？」

「私含めて5人よ。今いるのは朝比奈さんに古泉君そしてキョンね」

「いいだろう。顧問をやればいいのか？」

「ええ、お願いするわ！」

「すまないが今日は仕事が残っているんでな。また明日から参加させてもらうよ。」

「明日は休みだから、不思議探検をするわよ。9時に駅の北口集合、遅れたら罰金ね。」

「わかった。じゃあ、また明日。」

そして、土曜日の今日

「キヨン遅いな。」

「遅いわね。あ、来たわね。キヨ〜ン罰金！」

そして、あの喫茶店でくじを引く、俺は……古泉とか……
・くそう何でハルヒや朝比奈さんじゃないんだ！

「では、よろしくお願いしますね。」

キヨンは長門とハルヒは朝比奈さんと3組に分かれて探索へ

「12時にも一度ここに集合ね！何か見つけてくるのよ。」

さあ、古泉は何を話してくるのかな？

「どこへ行きましょうか？」

「そうだな、この町を知らないので適当に頼む。」

「では、少し時間を潰しましょうか。少し離れたところの喫茶店で話しましょう。」

「ああ、わかった。」

喫茶店

「単刀直入にお伺いします。あなたは何者ですか？」

お、これは大胆に聞いてきたな。もっと回りくどく聞くもんだと思っただよ。

「何者と言われても俺は日之影空洞としか言いようがないな。」

「失礼かと思いましたが少し調べさせてもらいました。ですがあなたのことは何一つ出てこない。そして尾行してもいつの間にかいなくなる。僕が聞いているのはあなたが例えば超能力者だとかそういうことです。」

やっぱり調べてたか。昨日から少しおかしいなとは思っていたからな。まあ、尾行の時は異常全開で消えたけどな。

「そうか、じゃあ、観念しよう俺は異世界人だ。あと超能力かと言われれば少し違うが能力も持つてる。」

「では、あなたはなぜ涼宮さんに接触を？」

「いま、俺はこの世界には来るつもりはなかったんだ。世界を旅している途中この世界に引きずり込まれた。だから長門の家に居候している状態でな、移動装置の設定が完了したらさっさとおさらばさ。涼宮に近づいた理由は面白そうだったからな。あ、俺は涼宮をどうにかしようなんて考えてないからな。」

「信じるかはあなたの行動で判断させてもらいますよ。では、探索を続けるとしましょうか。」

といい伝票を持ち古泉は立ち上がる。

「ここは奢りますよ。情報料ですよ。」

といい、後はこの町を案内してもらった。何の変哲もない普通の街なのになぜこんな人外魔境になっているんだろうか？ドクターの力ーディフのように時空の裂け目の跡地なのか？

さあ、12時になったのでもう一度のくじ引きだ。よし、今度こそ！

なんで？おのれ！涼宮ーお前は何なんだーてな感じでハルヒとなりました。朝比奈さんは？どこ逝ったの？長門は？

「なにそんな不機嫌そうな顔してるのよ。私とがそんなにいや？」
別にそういうわけじゃないんだが見た良し頭良し運度神経良しと三拍子揃っている美人と歩いているのになぜだ？

「いや、そういうわけじゃないんだが？」

「なんで疑問形なのよ。」

「いや、なぜこんなにきれいな女の子と歩いているのに何も感じないんだろうと思って」

「デートじゃないからじゃない？それに恋愛感情なんて一種の気の迷いよ。気にするものじゃないわ。それでも仮に科学に身を置く者なの？」

「ああ、その通りだな。」

としやべりながら町を探索したそして集合時間間際にこんなことを

聞いてきた。

「あなたは宇宙人や未来人、超能力者そして異世界人が本当にいると思う？」

「授業の時に言っただ。俺はそれを探すために物理学者になったんだ。自分で自分の夢を否定してどうする。ここにこの日之影空洞が宣言してやろう。宇宙人、未来人、超能力者、異世界人はこの世界にいる！」

「ばっかみたい、空洞が宣言して何になるのよ。」
と言いつつも笑っていた。そうだよ、いるんだそれも君のすぐそばにね

そうして今回の不思議探索は終了を迎えた。さて、この世界にはいつまでいようかな？

俺の職業（後書き）

名前は悩みましたが能力から考えさせてもらいました。
少し長くなってしまいました。
それでは感想をお願いします！

次の旅へと

あの不思議探索から数日経過しキヨンの方はあの探索で朝比奈さんからアプローチを受け、古泉からは昨日アプローチを受けていた。モテモテだな。

そして俺は部室で古泉とゲームしたり朝比奈さんと雑談したり長門に本を貸してもらったりしながら過ごした。

そして今日おかしなことが起こった。それは、少し前に遡る。

4時間前長門家にて

「長門よ、お前たち情報統合思念体は自立進化の可能性を探るために涼宮ハルヒを探索してるんだよな。」

「そう。情報統合思念体は自立進化の可能性を探している。だから涼宮ハルヒを観察している。」

「そこだよ。なぜ涼宮にこだわる？他にも自立進化の可能性はある。」

「！？それはなに？」

「こいつだよ。」といいターデイスを指をさす。

「これはただの次元超越時空移動装置特に特異するべき点はない。」
「わかってないな。」

「これはただのターデイスじゃないんだよ。世界を渡れるんだいわば世界を凝縮したようなもの。これ一つが一つの世界だといっても過言ではない。こいつの調整をするから手伝ってくれ。その時にこれをスキャンしてみるがいいそうすればこいつのすごさがわかるだろう。」

といい長門とターデイスの中に入る。

「××××××××××××」

と長門が呪文？を言う。

「!？」

長門が固まる。

「これは涼宮ハルヒを超える何かがある。本質的には涼宮ハルヒと似て非なるもの。自立進化の可能性になりえるがこれは情報統合思念体では理解不能役に立たない。」

高度すぎ？

「そうだったか。少しでいい調整を手伝ってくれ。」

「・・・・・・・・・・」

無言で有名カレー店のチラシを見せてくる。

「ここに今度つれて行ってか？」

無言で首を縦に振る。

「ゲ！これ一皿3000円もするじゃねえか・・・・・・・・・・」

無言で長門が見つめてくる。

「わかったよ。連れて行ってやるから手伝ってくれ。」

「わかった。」

と長門に言いくるめられカレーを奢ることが確定しながらもターデイスの調整をしているとき……

ガタン

とターデイスが揺れ機器から火花が散る。

「どうしたんだ？」

長門に聞いてみる。

「涼宮ハルヒが新たな世界を創造しようと新しい時空間に自分と彼を閉じ込めた。」

ああ、あれは今日だったのか。

「これでそこには行けないか？」

ターデイスなら……

「今の調整では不可能、できるとしても……………」

キョンスIDE

妙なことになっちまったな。閉鎖空間にハルヒとともに閉じ込められちゃったな。古泉はどこにいる？

あ、あの赤い球体は

「古泉か？」

「はい、そうです。」

「もっとまともな姿で登場すると思っていたが？」

「それも込みでお話することがあります。正直言います。これは異常事態です。「そうだな。」

！？声のする方に目を向けるとドクターが

「なんでお前がここに？」

といい触ろうとするがスウウと手がすり抜ける。

「あ、あれ？」

「そうだ、古泉ですら無理なのにどうやって入れると思っているんだ？これはホログラムだ。俺の船から映し出してる。」

「そういえば朝比奈みくるから伝言を言付かっています。ごめんなさい、私のせいです。」と「長門からはパソコンをつけるだよ。」

「俺からは一つだけ眠れる姫を起こすのは王子様の仕事だぜ。」
古泉とドクターの体が消えていく……

「お、おい、まて」

「パソコンをつけるよ。わかったか？じゃあ、世界はお前にかかっている。勇者みたいでいいだろ？」
といいドクターが消える。

「では、私もこれまでのようですね。そちらの世界で私が生まれるようなことがあればよろしくやってください。それでは」

おい、古泉まで……よし、パソコンをつけよう。

SIDE OUT

とここからは原作通りだ。特に言うべきことはないだろう。
あの空間のエネルギーを吸収したお蔭でこの世界から離れられるようになった。

「キョン、やったな！」といい肩を叩きまくる。

「軍隊と戦えるような腕で肩をたたくな。へたすりゃ吹き飛んじまう。勘弁してくれ。」

「つれないな。さあ、差し詰めお前は世界を救った勇者つてところだ。さ、ここからはどうするハネムーンか？」

「ふざけんな。」

「まあまあ、これで俺はお役御免だな。ここで俺は消える。そして知られざる英雄で忘れられる。いままでは異常を最小までに抑えていたが最大にまで上げる。あ、お前たちの記憶は消えないぞ、長門に頼んで消さないように頼んだからな。残念だったな。三日後俺は発つだから電話番号を覚えておく。」

「何でこんな急に？それに世界が違ふのなら電話は通じないんじゃない？」

「元々違ふ世界に行くつもりだったんだ。その世界に行かせてもらうよ。俺の電話は特別性だぞ。宇宙の端から端でも届く。世界も同じだ。」

「じゃあ、何時に行くんだ？」

「三日後の夜7時だ。」

「長門の家に7時だな？」

「ああ」

そして、三日後

「なんでハルヒ以外全員集合しているんだ？」

「僕は世界を移動する装置を見たかったもので」

古泉が正直に

「私は普通にお見送りに」

朝比奈さんは可愛らしく答える。

「一応SOS団の顧問だからな。見送りぐらいする。」
キョンが答える。

「じゃあ、俺の船を見せよう。」
といいあの部屋の襖をあける。

そこにはターデイスがある。反応は三者三様

「これが？これは1960年代のイギリスでのポリスボックスじゃないですか。」

古泉が

「こ、これはまさかこれがここに？じゃあ、あなたは……」
なぜあなたは驚愕しているんですか？朝比奈さん？私は未来で何かしたんですか？俺……」

「やつぱりこれか。見た目は変わらないのか。」
キョンが言うがこの見た目がいいんじゃないか。なぜわからない。

「古泉よ。なら中を見えるか？」
そついいドアを開ける。

ガチャ

「これは………すごい！」

なんかすごい古泉のキャラが変わっているな。これが素か？

「はう」バタア

朝比奈さんが倒れた。

キョンは外で待っている。

「なぜ見た目より中が広いの？」

「企業秘密だ。」

「では、行くとしよう。長門よ、調整は完璧だな？」

「完璧」

「では、出てくれ。」

「待つて、これを」

といい長門が一冊の本を渡す。「ハイペリオンの没落」よりによつてこれか・・・

「読んで」

といい見つめてくるので

「ああ、わかったよ。」

「では、出てくれるか？」

ガチャ

ドアを閉める。

「じゃあ、何かあればまた来る。また逢う日まで。」

「では、また」

「またね。」

「またな」

ギューーン！ギューーン！とポリスボックスが消えていく……………

「行つたか？」

「この世界から彼の反応が消滅した。」

「またと言つたんです。また会えるでしょう。」

ターデイス内部

「ハルビの世界はまた来ないとな最低でも消失の時にはな」

では、あの空間に行くのでしょうか、

白い空間へ

「もう私にこんな子を押しつけてあいつは何を考えているのかしら？」

アテネはつぶやく。

「言ったところで無駄でしょ？待ちましょ、気長にね」

ギューーン！ギューーン！とポリスボックスが現れる。

「やっと来たわね。」

ガチャ

「あ、アテネあの送った子はしっかりといえる？」

「ええ、ここにね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「無言でナイフを構えるのはやめてもらえませんか？朝倉さん」

次回へ続く！

次の旅へと（後書き）

強引ですが終わらせました。正直この世界は消失やエンドレスエイトがありますのでまた後でも来る理由は山ほどありますね。ドクターにはやっぱりコンパニオンが必要でしょう。ということではルヒ本編では初めと消失そして驚愕にしか出ていませんので朝倉さんにご登場願いました。

では感想よろしくおねがいします。

コンパニオン

なんで俺戦ってるの？

「ハアアアア！拳破拳破、拳々破アッ」

「ふん、効かないわね。今度はこっちの番よ。」
ほんとになんでこうなっただらうね。

一日前

「無言でナイフを構えるのはやめてもらえませんか？朝倉さん」
なんでナイフ向けられてるの？

「てか、何で向けられてるの？」

「そのぐらい自分で考えなさい。晩御飯までには帰ってきなさいよ」
「」

おい、まてアテネなぜとめない。それに晩御飯ってなんだ。

シュン、ビュン

「おい、まて話せばわかる。」

「問答無用」

なぜ知ってる？ ナイフ避けながらネタやるのは神経使うな。

「私あそこで消えたんでしょ？何でこんなところに送ったのよ」
「」

「いや、一緒に旅をしてもらおうかなつと」

「何であんたと一緒に旅をしないといけないのよ」

「戻ったところでもう統合思念体とのリンクは切れてる。今の君は妙な力が使える人間じゃない美少女女子高生つてな感じた。魔法少女もビックリだな。」それはもうね。情報連結解除なんてどんなチートだよ。

「じゃあ、どうしろつてのよ……」

「だから俺と来い。その中で答えが見つかるかもしれないだろ。それに元の世界にずっとは無理だが少し見に行くぐらいなら定期的にさせてやる。」

「いい、行かせてもらうわ。でも一つだけ条件があるわ。」

「そんな簡単に決めてしまっているのか？」

「だからこそその条件よ」

「何だ？」

「何なんだろう。俺に死んでくれとかはきついな。まあ、死んでも死なないけど」

「私と戦いなさい、あなたが勝ったらついてく、あなたが負けたらその時は……あなたの命をもらうわ。」

おお、過激だな。

「いいだろう。アテネ合図頼む」

そろそろ行こう

「勝ち負け決まってるないけどいいわ、じゃあねアテネ」

「また、3人でご飯食べましょ」

「ああ」「ええ」

「「またね」」

「ええ、また」

ポリスボックスに入る

「何此処！」

といい外に飛出しポリスボックスの周りをぐるぐるとまわる。

「中の大きさと見た目が比例しないわ！なにこれ！こんなのに負けたとなれば納得できるもんだわ。」

「あ、ああ、勝手に納得しておいてくれ」

次の世界はどうしようかな。あ！朝倉に聞いてみよう。

「おい、朝倉「朝倉ってのをやめてくれない？他人行儀でいやだわ。これから長く共に旅をするんでしょ。」

「わかったよ。涼子ちゃん」

「涼子ちゃん言うな！涼子よ！わかったわね。涼子よ」
ナイフ向けながら言うのやめてもらえませんか？

「わ、わかったよ。涼子ね、涼子OK、OK」

「分ればいいのよ。分ればね／＼／」

顔を赤くするほど嫌だったのか……残念だな。涼子ち「何か？」だからナイフ向けないで……

「涼子、どこの世界に行きたい？」

「どんな世界があるのよ？」

「どんな世界でもある。剣と魔法の世界、未来都市、科学と魔術の世界、夢の世界、冥界や天国、魔王までいる世界だってある。より取り見取りだ。」

「じゃあ、妖怪が見てみたいわ。本で読んで見てみたかったのよ」あ、涼子が目を輝かせながら言うてくる。

「じゃあ、出発だ！」

そう言いターデイスを作動させる。

「2000年代に行こう。」

ギョォーン！ギョォーン！独特のエンジン音を鳴らし動き……ああ、着いたか。

まず、外の様子を見よう。このパソコンで見れるだろう。ガチャ、ガチャ　なんか外で軍隊みたいなのがターデイス囲んでるんだが、これってヤバいところに出たか……あれ？一人だけ軍隊じゃないな。あの特徴的な服は……

「さあ、外に出てみよう。」

「大丈夫なの？武器持って構えてるわよ。」

「こっちは武器なしだ。やられてもこっちに正義がある。」

「不法侵入だけどね。」

「これは痛いところを……。」

「では、参りましょうか？お姫様」

「行きましょう。」

俺が涼子の手を取りターデイスのドアを開ける。

ガチャ

「おい、貴様何者だ？」

軍服の一人が聞いてくる。

「俺h「待ちなさい、こちらから名乗るべきです。私は八意永琳です。あなたは？」

やっぱりえりんか……

T
O
B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
↓

コンパニオン（後書き）

やっぱり東方の世界に行つたとなれば歴史のーから見ていくべきで
しょうしね。では感想よろしくお願いします。

天才

「俺は「待ちなさい、こちらから名乗るべきです。私は八意永琳です。あなたは？」

「やっぱりえりんか……」

「俺はドクターだ。一つだけ質問させてくれ。今年の年を教えてくれ。」

「今は××年××日ですけどそれがどうしましたか？」

「すまん、涼子間違えたようだ。」

「何を？」

「首をかしげるが」

「時代だよ。時代、今は西暦2000年代じゃない。それより8000年以上前、紀元前6000年と少し前だ。ミस्ता……」

「ミस्ताじゃないわよ。」

「と涼子はジト目で見てる。ジト目いいよね。好きなんだよ。」

「ずっとその顔で頼む。」

「変態」

「ひびい……」

「お話し中よろしいかしら？あなたここにどうやって来たのかしら？」

「この箱に乗ってだけど？」

「こんな物でできるはずがないでしょう。え〜と、ポリスボックスですってね。」

「すまん涼子、中で待っていてくれ少しかかりそうだ。」

「ええ、わかったわ。」

「あなたたち下がってなさい。」

「しかし、「大丈夫です。スキャナーに武器の反応は無かったですよ。」

「わかりました。」

しぶしぶといった感じで軍服の男たちは部屋を出ていく

「では、話の続きをしましょうか。こんなものでここまで来れるわけがない。此処は地下25階、それにこの町の外周200キロに亘って能力によるシールドが貼られていて外からは入れないわよ。ドクター？」

「俺が来た方法はそんな単純にシールドを突き破ったとかそういう物理的に来たというのとはすこし違うな。簡単に言うなら空間転移かな？」

「そんな・・・いや信じましょうそれ以外にここに来る方法がない。でも、どうしてこんなところに？」

「ここに来るつもりはなかった時代を間違えたんだ。もともと今から数えて8000年後に行くつもりだったからな。」

「まただよ（呆）前は世界を今回は時代だ。もう、間違えるのは必然なのか？」

「時代？あなたの話から推測するとこの青い箱は、時間と空間を移動できるように聞こえるけど。本当なの？」

「ああ、俺はあなたからすればタイムトラベラーだ。」

「こんなバカな話があつてたまりますか。いくら私でもタイムマシンなんてものを作るとすればものすごく大掛かりな装置になる。それに空間移動まで？中を見せてもらってもいい？」

「ああ、いいぞ。」

ガチャ

「な、何よこれ、外見と中が一致しないじゃない。ちょっと待って理解するから……」

「そっぴやえーりんって自他ともに認める天才だったな。だからこそ……」

「おい、やめておけここを理解すれば頭がおかしくなるか死ぬぞ」
「此処はあのターデイスを超えるんだタイムボルテックスならぬワールドボルテックスか？があるんだからな。」

「そうさせてもらっわ。理解しようとするだけで頭がおかしくなりそうよ。」

「あ、話は終わったの？」
涼子が訊いてくるが

「まだだ。おい、そうふて腐れるなよ。ここのことはこの時代の人間に聞くのが一番だぞ。」
そう言ったら少しは納得したようでパソコンを弄り始めた。

「で、あなたたちはどうするの？このまま8000年後まで行くの？」

「いや、少しだけこの時代に、いようと思う。で、一つ提案だ。少しだけ君の家に泊めてもらえないか？」

「いいけど、あなたはその対価に何を私にくれるのかしら？」
えりんが少し期待した目で見てくるので

「これを見せてやろう。」
と言っているコートの内ポケットからペンのようなものを取り出す。あ、言い忘れてたけど今の服装は俺は10代目ドクターの服装で涼子が黒リボンが真ん中にある私服である。あのターデイスの山のような服から選んだ。服で何が変わるのかと思っていたが全然違うな。涼子可愛いもん。あ、話がずれた。

「これは、ソニックスクリュードライバーだ。」
今まで使いたかったが使いようがなかったしな

「どんな使い道を？」
えりんが玩具を見つけた子供のように目を輝かせる。何で俺が会った女の子はみんなこんな目をするんだ。好きだけどねこんな目する人は。

「ドアを開けたり閉めたり、それに物を壊したり直したりいろんなことができる。これを応用すればいろんなものができる。」

「これはいつの時代の？」

「此処の歴史が俺の知ってる通りならばこれは今から1億年後以後の物だが？何でそんなことを？」

「ここで私がこれをもらってしまえば歴史が変わるんじゃないかと思つて「いや、君ほどの天才ならすぐにこれぐらい作れるよそれが少し早まつたぐらいで変わる歴史なんて微々たるもんだよ。」

「じゃあ、ありがたく研究させてもらうわ。」

「ああ、終わつたら返してくれ。それはもう作ってないんだ。工場は今はバナナ園だ。」

「何でバナナ園？」

「なんでそんな不思議そうなんだ？」

「美味しいじゃないか、バナナ」

「何か釈然としないものがあるけどまあいいわ、これからよろしくね。ドクターそれに「涼子よ。」「涼子」

「なんでそんなにメンチ切つてんですか？いや、恋愛フラグはねえよ。勘違いされては困る。涼子からはあの奇襲の失敗した理由だしえーりんからは実験材料として見られてそうだしね。こええ……」

「こちらこそよろしく永琳」

てなわけで永琳の家に居候させてもらうことになった。あの後聞いた話だとこの都市は穢れと呼ばれる人間の寿命の原因からシールドで守ってるらしい、でも、科学力だけなら21世紀の地球とそう変わらないようだ。

「じゃあ、なんで俺は戦ってるの？」

何でこうなるの？まただよ。後ろにはぼろぼろの永琳、はあ、前の世界の奴の言葉を借りるなら

「やれやれ」

く！

次回に続

天才（後書き）

ソニックドライバーはここで出さないと使い道がなくなりそうだったので次初妖怪です。感想よろしくお願いします。

妖怪

てなわけで、ここに来た日から、一週間ぐらいたった。その間涼子は、俺と町を探索したり、図書館で妖怪の動画を見ていた。あの目の輝かせようはビックリだな。で、俺はえ〜りとソニックドライバーの改良したり霊力やら妖力やらの講義を受けたりしていた。知識としてはターデイスのお蔭で分かってても実物を見るのは違うね。やっぱりえ〜りんは本物の天才だった。ソニックドライバーだけでソニックブラスターやらソニックキャノンやら作ってたしそれに、素粒子ガンまで作ってた。軍隊と戦えるって受け売りやめようかな・

「お〜い、ドクター？どこにいるの？」

ターデイスの中で永琳が言うが異常に広いターデイスの中では聞こえない。

「お〜い」

あ、永琳だ。

「何だい？」

「ああ、そこにいたの、今日シールドの外に出て調査をするからついてきてくれない？」

「調査？」

「そうよ、穢れの度合いを調べるの、いまこの都市の住民は月へ移

住する計画を進めてるのそのためにどのくらい地上に穢れがたまっているのか調べたいのよ。」

やっぱ、月へ移住するんだ。それと同時にまた飛ぼう。

「わかったよ、涼子は……今日も図書館が、此処でも読めるのになんでわざわざこの町の図書館使っんだろ。いいや、今日も帰ってくるのは遅いだろうし、じゃあ行こうか」

涼子の奴長門みたいになってるな。親と一緒になら子も似るってか。

「ありがとう。一人で行くのは心細かったのよ。」

ということがあり

「さあ、出発だ！」

「テンション高過ぎない？」

「いいの！」

「じゃあ、これを使って二手に分れて測定しましょ」

と言いゴツイ機械を渡してくる。機械自体は21世紀の物とほとんど変わらないのね。

「じゃ、二時間後に町のゲートで集合ね。」

「妖怪とかいるんじゃないのか？大丈夫か永琳？」

「私はこう見えても強いだよ。」

といい力こぶを作る。全然強そうに見えない。

「何かあつたら行くから」

「大丈夫だって、心配性ね。」
と言いついて歩き出す永琳。

「大丈夫かな？」
心配するんじゃない・・・すればフラグになるからね！

「へえ、こうなつてんだ。」
穢れは町の中を5として月が1以下シールド外が多いところで30以上低いところでも20ぐらいなんだな。

「これならすぐに測定終わりそうだな。」
早く帰って寝たい・・・俺の好きなことは1、旅をすること 2、寝ることだ！

ピピピピピ

「最後の測定終りわりつと」
じゃあ、帰ろう！

「で、何でおれの方が早いのか？ねえ、門番さん」
この門番さん、あの初めの時の軍服の一人で二度目にあつたときものすごく警戒してきたけど永琳のおかげで今はよくしゃべる。この町の常識とかは正直永琳とかよりわかりやすい。永琳は天才だから少しずれてるからね。

「今日は誰待ってた？涼子ちゃんかい？それとも永琳さんかい？あんな美人と付き合ってたんな裏ワザ使ったんだい？」

「おい みうs ミス おい 何勘違いしてるわけ？付き合ってる？世界がひっくり返ってもあり得ねえよ。で、待ってんのは永琳だ。」

「永琳さんならあんと出て行っただっきりだよ。考えてみれば少し遅いね。見に行ってきたらどうだい？」
ほら、言わんこっちゃない。

「ありがとう。じゃあ、行ってくる。」
と言い全速で駆け出す。

「なんで、こんなに面倒なことになるんだろうか。」

さあ、ターデイスまで戻ろう。

「此処なら探せるはずだからな」
パソコンを操作して永琳を探す。

くそ、範囲が広すぎる。どうやって探そうか……あ、永琳は俺のソニックドライバーを持ち歩いてたな。あれの信号を……見つけた。此処から南西へ34キロ

何でこんな遠くに？メインスクリーンに移そう。

「なん……だ」と
いやいや、ネタに走っている場合じゃない。永琳は、今え〜と鬼かなと戦ってる。

あの鬼強いな、涼子といい勝負じゃないか、てことは、ここじゃ最強クラスってことか・・・永琳じゃ少し辛いかもな、正直永琳は、いくら強いといっても後衛タイプだからな、あんな前衛バリバリのタイプには、さすがに押されてるな。

「よし、行くぞ。」

そう言つてターデイスを作動させる。ポリスボックスが徐々に薄くなり消えていく・・・

涼子SIDE

「最近あいつが私に構ってゲフンゲフン、私の答えを見つけるのを手伝うんじゃないの？」

と独り言をつぶやきながら図書館の個人用のパソコンのモニターを見ている。

ギューーン！ギューーン！

「あれ？あの音って・・・ち、ちよつと」

と言い猛スピードで図書館から出て永琳の家へと戻る。
実にここまで20秒・・・早すぎ！！

「どこ行くよ・・・」

と消えていくポリスボックスを見つめながら呟いた。

SIDE OUT

永琳SIDE

「さあ、ここまで見たいだな、人間」

と鬼？の妖怪が迫ってくる。

やっぱりドクターの言った通り一緒に行けば良かったのかしら？いまさら言ったところでしょうがないわね。でも、まあ、いいわ。私が死んでもこの都市は月へ行くわ。ドクターはこの未来を知っていたからああ、言ったのかしらね？

鬼が妖力で作ったエネルギー弾を腕から打ち出す。

でも、もう遅いわ。じゃあね、涼子、ドクター

ギューーン！ギューーン！

この音は？

SIDE OUT

着いたようだな場所はちょうど鬼と永琳の間

ガチャ

「これからは俺がお相手しよう。」

「おい、永琳ターデイスに入ってる。」

「で、でもあなたひと」「大丈夫だ。接近戦なら負けはしないさ。」

「わかったわ。でも、死なないでね。」

「俺も死にたくはないからな。ま、俺はまだ死なねえけどな文字道理。」
アブノーマル
「そう言い異常を全開にする。」

「消えた？ま、別れ話は済んだか？じゃ、始めようか。」
鬼に気づかれる前に後ろに立ち本物の日之影がやったように、はで
きないので首を持って地面にたたきつける。

「てめえ、は？」

此処はこつ名乗るべきだろ

「元、英雄」

次回へ続く！

妖怪（後書き）

次戦闘です。涼子をどこで一度離脱させるか迷います。
では、感想よろしくお願いします。

十二の試練へゴットハンド

「元、英雄」

そっいいい、鬼と拳を打ち合う。

「拳破拳破、拳々破アー」

初めから飛ばさないと少しまずい……正直こいつは会ってみてわかったが涼子よりも格上だ。

「痛つたいな。今度は、こつちからだ。」

という形でダメージはあるようだが致命傷には至らない。まずい、非常にまずい……

てな感じで一進一退といった感じで二時間以上も戦い続けている。

どうすればいい、やっぱり至近距離での連続で拳破をかますしかないようだな。

「殺り合つてるときに考え事か？」

ズゴオオオオン

「へへ、やべえなこれは。」

油断したぜ。拳破は後8発が限界だな。

「じゃあ、ここでお前を殺してあの箱の中にいる女を殺せば終わリだな。」

ターデイスの中は安全だろう。何せあのドアはチンギス・ハーンの騎馬軍団の攻撃でも敗れなかったんだから。

「さあ、来い最終ラウンドだ！」

そう言い、指を鳴らし「パチン」ターデイスのドアを閉める。

「もう立つのもやつとなのに何を言うかと思えば」
と勝利を確信している鬼が言う。ここで、一つ目はここで捨てることになりそうだな。

「なら、来いよ。さあ！トドメもさせないのか？」
こんな挑発は普通人間相手には聞かないんだがな。鬼だからこそこ
ういうのは聞くんてもんだ。鬼は嘘を嫌うからな。

「ああ、そこまでいうのなら……行くぞ」
と言い放った瞬間俺の右胸に鬼の腕が突き刺さる。

永琳SIDE

助けに来てくれたのはいいけど何やってるのかしら？あ、このモニ
ターで見れるみたいね。ここをこうしてつと映ったわ。

戦ってるみたいね。すごい……彼、接近戦なら最強ね。霊力
や気で強化している訳でもないのに妖怪とそれも最強レベルの妖怪
と勝てないまでも渡り合ってる。ほんとに彼人間かしら？

二時間経過……

あの二人？いつになったら決着がつくのかしら？終わら『ズゴオオ
オオン』な、何？ドクターが吹き飛ばされてるじゃない。

煙が晴れる。そこには満身創痍ながらも立っているドクター

だ、大丈夫なの？「なら、来いよ。さあ！トドメもさせないのか？」
ちよつと何挑発してるのよ！

「ああ、そこまでいうのなら．．．行くぞ」と鬼が言う。

「ドクター！ドクター！」と叫びながらドアをドン、ドンとたたく
が開かない。

「何で開かないのよ！」

ザクツツと言う音がしたと思ったらドクターの右胸に鬼の腕が突き
刺さっている。

「いやあああああああああああああああああああああああああ
ターデイスに永琳の悲鳴が響き渡った．．．．．」

SIDE OUT

「終わったか．．．．．」
と鬼が呟くが、

「楽しかったか？なら、終演だ。」

と俺は言い全力で拳破を鬼の頭に向けて撃つ。

「ああ、楽しかったぞ．．．．．」

と言ひ鬼は頭が吹き飛び動かなくなる。

倒したか？あ、アテネの奴再生後はタイムロードと一緒に体が安定しないように十二の試練^{ゴットハンド}を改悪しやがったな。

ああ、もうヤバいな……。落ちるぞ。でも、その前に「パチン」ドアを開けないて……。――

永琳SIDE

「そんな……。私のせいで……。――」
モニターを見つめながら虚ろな目で呟く。

「これはタイムマシンなんでしょ！戻れ！戻れ！戻れ！」

いつもの永琳ならば起動ぐらいはできるが今は完全な錯乱状態、不可能だ。

「なにこれ……。――」

ドクターの体から光が飛び出る。それは永琳では理解できない。この時代にはなく、もしかするとこの世界では生まれないかもしれない。い、「幻想」《魔法》この世界の魔法とは似て非なるもの本物の奇跡^{タヌム}とある世界では、それを『宝具』《ノウブル・ファンタズム》と呼ぶ。

そうしてドクターの体が再生される。

「え？……。なんで？」

キョトンとした顔で言うが理解できない。

ドクターが至近距離から攻撃し鬼の頭が吹き飛ぶ。

倒したみたいね。あ、あれ？なんでドクターは倒れそうに「ガチャ」
ドクターが指を鳴らすと同時にターデイスのドアが開く。

「開いたわ！ドクター！」

と言いつターデイスからボロボロの体のことを忘れドクターのところに駆け出した。

S I D E O U T

あ、永琳だ。後は頼もう。

「永琳、後は頼んだ。ターデイスを作動させてくれ。君ならできるだろう。」

と言いつ俺は意識を失う

「ええ、わかったわ」

と微笑みながら言ってくれる。

永琳は俺をターデイスの中まで運び、その頭で起動させる方法を探る。のちに月の頭脳と呼ばれる人間だからできることだった。

ギューオーン！ギューオーン！

「これでいいわね。」

と疲れ果てて眠る。

涼子 S I D E

消えてからも二時間以上、もう戻ってこないのかしらね？この世

界もいいところだけどずっといるには向かないわ、だから、戻ってきなさいよ。ドクター・・・・・・・・・・

ギューーン！ギューーン！

消えたはずのポリスボックスが戻ってくる。涼子は近づきドアを開けるとそこには・・・・・・ボロボロの永琳にドクターは死んだように眠っている。

「何してたのよ。」

次回に続く！

十二の試練へゴットハンド《後書き》

十二の試練一回目の使用です。正直どこで死なせるかを考えないと使えないので使い道が少し難しいです。話は変わりますがそろそろドクターフーの3期が日本でやりますね。楽しみです。では、感想よろしくお願いします。

月へ

「何してたのよ。」

涼子が二人に聞くが眠っており誰も答えない。

「はあ、何で私がこんなことをしないといけないのよ。」
と言いながら永琳を背負い病院へと連れて行く。

俺は？

病院

「何があつたのよ？」

涼子が回復した永琳に聞く

「かくかくしかじか」

「四角いムーブってわけね。」

これで理解できるのがご都合主義だね。涼子は理解したようだけど永琳はあの回復というか復活のことは話さなかったようだ。自分が理解できない現象はとことんきらいなようだ。

「で、ドクターは？」

「あ、忘れてた………」

ターデイス内部

「俺頑張ったのに扱いひどくね?」

仕方ないのよ。というアテネの声が聞こえた気がした。

「やっぱりここね」

涼子が言う。あなたが忘れたんじゃない?

「そうね。」

永琳があれについて教えてほしいそうでうずうずした感じで話す。2
4時間以上たってからにしてくれ

「俺はまだ、動けん再生サイクルに入ってまだ早いからな。少し肩
を貸してもらえるか?」

「ええ」

永琳が肩を貸してくれる。

「君はもう大丈夫なのか?」

「あなたの貸してくれたソニックドライバーでこの都市の技術は2
世紀は進んだわよ。あのくらいの傷は直ぐに治るわ。」
すぎすぎだろ。

「じゃ、来るなら、二日後ぐらいに来てくれ。」

と言いターデイス内部の居住スペースへと行くために螺旋状の階段
を肩を借りながら降りる。

居住スペース

ベッド二は俺が横の椅子には永琳がいる。なぜ? 帰る用に言ったる

「なぜ居るのって顔してるわね。あれについて教えてもらうまでは寝かさないわよ。」

最後のところだけなら興奮するのになぜこんなに寒気がするんだ・
・
・
・

「あれは十二の試練だ。^トあれのおかげで俺を殺すには12回殺さないと死なない。文字道理今は死なないだ。」

でも、Bランク以下の攻撃無効化するらしいんだが、無効化されなかったな。アテネの奴ほとんどタイムロードと変わらなくするために改悪しすぎだろ。

「そんな、あなたは非常識の塊ね。でも、あれは科学というよりは魔法の類だと思うのだけれど」
やっぱりそこに気付くか

「あれはターデイスやソニックドライバーといった類の超未来の科学というわけじゃない、永琳の言った通りこれはとある世界で「宝具」と呼ばれているもので、俺の体自体がその「宝具」だ。ずっと発動してる今この瞬間もな、そして「宝具」とは、その世界での幻想^{タズム}そのものだ。もしかするとこれから何千年から後生まれるかもしれない。だが、ここじゃあ消え去る。廃れていく欲しいなら何千年か待つんだな。」

「だからスキャンしたときあなたが微弱な何かの反応を帯びていたのね。」
そうだったのか。自分じゃ発動しているのが普通だからわからないしな。

「だいたいわかったわ。じゃ、また二日後に会いましょ。」
と言いスタスタと歩いて出ていく、ここまで来たのならもう少し喋

つてからでもいいのに

永琳SIDE

「顔赤くないかしら？」

永琳も女の子、それも年齢は20もいかないような女の子だ。死にそうなところを颯爽と助けてくれてそれも命まで使ってた。そんなことされればどんな女の子でも恋に落ちる。

「しゃべりたいからって無理に話したけど大丈夫かしら？聞いた話では大丈夫みたいだけど、考えるのはやめましょ、次に会えるのは二日後ね。それまでに、話すことを決めないね。」

永琳は天才だが、恋に関しては全くと言つての盲目である。

SIDE OUT

二日後、永琳と涼子が来た。

「調子はどう？」

涼子が尋ねるので

「ああ、最悪だ。」

「ち、ちよつと大丈夫なの？あわわわわ」

永琳がものすごくあわてだしたので

「大丈夫だよ。『冗談』冗談」

「ならいいわ、一つ伝えないと……明日月へ転移するわ。 3

日前の調査の結果から穢れの増大が確認されたわ。あの鬼の強さも
そういままでなら私でも十分に倒せるレベルの強さしかいなかった
でも、あの鬼の強さは異常だったわ。だから計画を前倒しすること
になったのよ」

「OK、話してくれてありがとう。じゃあ、俺たちも出ていく準備
をしようか涼子」

「えゝ妖怪見てないわよゝ」

「そういうな、この時代以外でも妖怪はいる。次の時代で見ればい
い。」

「わかったわよ。」

「今聞いていた通りだ。」

「また、会えるの？」

そんな捨てられた猫のような目で見ないでください。

「ああ、君が生き続けている限り定期的に会いに行くことにするよ。」

てなわけで準備は進む。

正直俺たちは生活自体はターデイスの中で行なっていたからな。準備
はない。

永琳の家から出てこの都市を見上げる。

来てからまだ2週間ぐらいしか経ってないのに技術自体は2000年
以上進んでる。ビックリだな。

そうして当日

全部でロケットは十二基発射するようだ。あ、今十一基目が飛んだ。この分だったら今日中に終わりそうだな。

「これでお別れね、ドクター」

「いや、そういうわけじゃないんだけどね。」

「間違えたわ、また会いましょ。」

「ああ、また会おう。」

「私も今度は月でゆつくりしたいわ。」

俺たちは今ロケットの発射台の下搭乗口でしゃべっている。乗り込むのは永琳が最後だ。俺たち喋っているからな。今ターデイスはここまで運んである。準備万端だ。

「では、今度こそ、ドクターまた会いましょ」

「じゃあな」

「最後に言い忘れていたわ、I love you」

「え？何？」

ウィーン ガチャン

訊き直す前にドアが閉まっちまった。あ、やばい爆風に巻き込まれる。早く入ろう。

ガチャ

朝倉が不機嫌そうな顔で聞いてくる。

「で？返事はどうするのよ。」

何でそんなに不機嫌そうなんだ、お前……

「わかんねえ、もう少し旅をして答えを見つけてから会うつもりだよ。」

「優柔不断ね」

「仕方ないだろ。大事なことだ。」

「無事に飛び立ったみたいね。」

「でも、あれは？」

あれは……

「あれが妖怪ね！また画面越しだわ……………最悪」
でも何をつて…………マズイ

「妖怪から何か出たわよ。」

「あいつ妖力で球状のエネルギー弾を作り出しやがった。あれがエンジンに当たれば出力が足りず地球に逆戻りだ。」

ガコン、ドオゴーン

糞間に合わなかったか。じゃあこの船で……………

永琳SIDE

「安全に出発できましたね。永琳さん」

「ええ、よかったわ。」

「でも、あの方とはあれでよかったのですか？」
横の船長が尋ねてくるが

「な、何であなたが知ってるのよ！」

「何でって永琳さんあなた通信用のマイクつけっぱなしでしたよ。
ロケット中で大騒ぎですよ。」

「うにゃああああああああああ「永琳さん！高速でエネルギー
ー体が接近中です。大きさは五十メートルほどの大きさでこのまま
の軌道だと1番エンジンに直撃、出力低下により地球へ墜落します。」

「ロケットを反らしなさい。左へ30度」

「無駄です。間に合いません。」

ガコン、ドオゴーン

「一番エンジン損傷、出力低下により地球へ墜落します。」

ギョォーン！ギョォーン！
何処かで聞いたような音だ。

「なぜか、墜落しません。「ロケットの皆さん。こんにちは！こちらターデイス号だ、月へ参ります。」
やっぱりあの人ね。最後の最後までやってくれるわね。そうじゃないや私の惚れた男じゃないわね。」

SIDE OUT

月へ12番ロケットを送った後

「朝倉はどうするんだ。このまま旅を続けるか？」

「いいえ、一回降りさせてもらっわ。長門さんからメールが来てたから」

「長門からメール？」

そう聞くとなぜかターデイスに設置されてある永琳特製のパソコンに指尾さす。

「ええ、メールよ。手伝ってってね。」

この時期で言うか時間の進み方が違うから時系列がわからないけどたぶん消失だな。

「わかった、送るよ。よし行くぞ」

ギューーン！ギューーン！

「おい、涼子着いたぞ。でも、少し座標がおかしいぞ。ここでもいいのか？」

「ええ、いいのよ。」

「12月18日午前3時だ。北高前、気を付けてな。」

「わかったわ、また会いましょう。」

「ええ。」

ガチャ

ギューン！ギューン！

ポリスボックスは消えていく。あの北高前から。

「カレー」

何でここにいるんだ長門よ。そして、バグが発生した状態でなぜ覚えてるんだ。

さあ、妖怪の世界に戻ろう。次は諏訪大戦だな。

次回へ続く！

月へ（後書き）

永琳は月へ涼子は消失へと行ってもらいました。涼子がメインヒロインになるのは消失終了後です。そして次は諏訪大戦へ感想よろしくお願いします。

俺の居場所

ギューン！ギューン！

「此処は、諏訪湖の近くの村はずれか。．．．．．」
じゃあ、諏訪子《ロリ神》の所に旅の安全祈願に行こうか、でも、いままででは、旅は安全じゃないけどな。ここで安全になるとはおもえないけどな。

「服はこのままでいいか。じゃあ、行こう！」

ガチャ

そして、歩くこと2時間．．．．．非常に村の皆さんに変な目で見られた。ひどい．．．．．それもそうだと思うけど、だって、今も前と変わらず10代目と同じ服着てるから服が合わない。

それにしても階段長すぎるぞ、何なんだ此処．．．．．

「もう30分だぞ．．．．．」

「ここに何しに来たの？」
幼女が話しかける。

「旅の安全祈願にね。ものすごく長い旅になるから、死ぬかもしれ
ないし、どうなるかもわからないからね。」

「そうなの、じゃあ、私も願ってあげるね。」

と言い幼女は笑う。断じて俺はロリコンじゃない。だが、こんな笑顔も悪くはない。

「ありがとよ。」

と言い歩き出す。

5分後

「やっと着いたか。」

神社も長さに比例して立派だな。

「あ、参拝客さんですね。こんにちは。参拝ならこちらですよ」と、巫女さんが言ってくる。巫女さんここにもいるんだな。早苗さんの先祖が何かかな？

「ありがとうございます。」

と聞きながらも本殿へと歩きだす俺

本殿へとあと少しとなったとき巫女さんが気付く

「そっぢゃないですってば〜」

結構ほんわかした人なんだな。

「で、ここの祭神が俺に顔を出したかだ。それを聞きに俺はここまできた。」

そう言々と巫女さんが

「諏訪子様！なにしてるんですか！勝手に外を出歩かないでくださいって言ったでしょう！〜」

「ごめんよ〜久しぶりに面白そうなのが来たから少し、少し見にに

行っただけじゃないか」

予想よりも中身も幼女なようだな。

「あ、その君、幼女とか思ったでしょ！」

急に襖から顔を出し何か言ってくるが

「諏訪子様！まだ説教は終わってませんよ！」

「ごめんよ」夏苗」

あの巫女さんは夏苗さんというらしい、早苗さんまで後何十代も名前は苗が付くのだろうか。そう考えればすごいな。

「すみません、諏訪様が……」

と夏苗さんが謝罪を仕切りなし言ってくる。

「大丈夫ですよ。夏苗さん」

「何で私の名前を？」さつきその駄神が言っていましたよ。」

何か横の神が「私は駄神じゃないよ！」とか言ってくるが、一参拝客に姿を見せる祭神なんて聞いたことがないぞ。

「で、あなたはいったいなんなんですか？普通の人は諏訪子様のことは見えないはずですが……まさか、妖力は感じませんが妖怪？」

と言い終わると同時に符を構えるが

「違うよ」妖怪だったら私がわかるしここに入れたりしないよ。それより、君は穢れが少なすぎる。人間だとすればありえないほどに。あなたは、何なの？」

諏訪子が真剣な目をして聞いてくるので

「俺はドクターだ。ここで言う医者……いや、陰陽師とでもいうべきかな。」

このころはまだ医者はいないから考えると陰陽師やら僧侶ってとこだが今の見た目を考えると陰陽師だろう。

「どくたー？変な名前、いや、そんなことじゃないんだよ。あなたはどこから来たの？この国、いやこの星？この世界じゃないよね。」
変に鋭い駄神だな。さすがは、神様ってわけだ。

「そう、俺はこの世界の住民じゃない。世界を旅してる。」

「そんな、バカな……」

夏苗さんが頭を抱えて唸ってる。普通はこうなる。神だからこそこの反応だ。

「じゃあ、ここにいなさい。」

諏訪子が、言う。

「あなたの望むことぐらいわかるよ。あなたは旅の安全よりも居場所を求めてるよね。あなたが昔何をしていたかはわからないけど、あなたの居場所はどこにもない。」

そうなのかもな。

「なら、此处が俺の居場所になってくれるのかよ。」

「うん」

即答する諏訪子

「なら、居させてもらうよ。なんせ、ここは俺の居場所だからな。」

「そつだよ。少しは、ここで住みなさい。」

「諏訪子様なに勝手に決めてるんですか！もういつも諏訪子様は……」

といった感じで俺はここに住むことになるとはな。ターデイスを此処に運ばないとな。

数日後……

夏苗さんに手伝ってもらいターデイスを此処まで運んだ。すごいんだな。永琳には霊力の座学しか教えてもらってないからわからなかったが、実践はこんなもんだったんだな。軽くターデイスが浮かんでたよ。

「ははあゝ」

今や、なぜかターデイスも信仰の対象だ。この時代じゃターデイスをは目立ちすぎるな。人の目につく場所に置いたのが間違いだったな。

「今や、この青い箱も信仰されてますね。私はこの箱の巫女になるんでしょうか？」

いや、知らないよ。

「そんなの私がさせないんだよ。駄目だよ。こんな箱には私の夏苗は渡さないよ。」

いつから諏訪子になったんだ。

「私は諏訪子様の巫女ですが、あなたのものではありません。」
「言い諏訪子の頭をお祓い棒でたく。」

ドン！

「あゝうゝ夏苗がいじめるよ、どくたー」

「お前のせいだ。」

ドン！

「みんなでいじめるよ」

と諏訪子は本殿へと行ってしまふ。

「楽しいな。」

「ええ、楽しいですね。」

と二人で笑う。

「うゝひどいよ」

聞こえてたみたいだな。こんなのもいいもんだ、楽しい日常。

だが、こんな日

常は続かない。

次回に続く！

俺の居場所（後書き）

早苗さんの先祖つてずっと苗が付いた名前なんでしょうかね。それが70代以上続いているなら考え付く方がすごいと思います。では、感想よろしくお願いします。

戦の前

そうやって、夏苗さんと一緒に諏訪子を弄って遊んだり、一緒に仕事を手伝ったりして過ごして一週間ぐらいたった時だった。

「どくた〜ご飯だよ〜」

いつものように諏訪子が呼ぶ。

「わかった。今いく」

と正しいいつもの本殿の食卓を三人で囲み食べる。神社の本殿つてもっと神聖な場所じゃないのか。俺や夏苗さんがここでご飯食べてもいいのか？

「此処の祭神がいつて言ってるんだからいいんだよ。」

俺が会った神ってこんなやつばかりだな。一人は神じゃないけど

「いいんですって私も生まれてからここで育ってますから。」

「そーなのか」

この時代にはもうルーミアはいるのかな？

「む、何か違う神がこの国に入ってきてるね。少し行ってくるよ」

「すごいな、俺でもターデイスを使わなければそこまでわからない。」

「

「そりゃあね、自分の国ぐらい守れるようになってないと」
と久しぶりに真面目な顔で言うので

「にゃ〜め〜ろよ」

頬をムニムニと揉む。やわらけえ、楽しいな！

「もう！行ってくる。」

「大丈夫か？ひとりで」

「戦おうとはしてないみたいだよ。してたら入った瞬間からやってくるよ。」

「じゃあ、行つてらっしゃい。」

二時間後

「ど〜う〜し〜よ」

本殿の居間で諏訪子がくつついてくる。

ドス！

「どうした？何があつたんだ。」

体から引き離しながら言う

「大和の神々が攻めてくるんだって」

「お前強いんじゃないの？」

「強いけど私とミシヤクジ様しかいないんだよ。数が負けてちゃ負

けちゃうよ。」

「それはいつなんだ？」

「七日後、だって。それまでにどうするか決めろって戦つか降伏するか……」

「明日、どれだけ強いか見せてくれないか？それからでも遅くはないだろ。」

そして、

「さあ、行くよ、どくたー」

開けた草原で俺と諏訪子が向き合う。夏苗さんは横で座ってみている。危なくなったら止めるんだと、

「ああ、来い神の戦いというものを見せてもらおう。」
「アフノーマルと言いつつと同時に限界まで薄めている異常を^{アブノーマル}発現させる。」

「どくたーが消えた？」

諏訪子が周りを見回し鉄の輪を乱射する。

だが、存在を認識できないので当たらない。

「うーあたらないよ」

「今度はこっちの番だ。」

と言いつつ瞬時に相手の間合いまで距離を詰める。そして、数発だけ拳破を叩き込むと

「ぐへ」

と近くの岩に激突しそのまま気絶した。

「夏苗さん、諏訪子大丈夫かな？」

「多分大丈夫だと思いますよ？」

何で疑問形なんだ？

「まず、運ぼうか……」

本殿

「神といえどこんなものか……あの時の妖怪が強すぎただけか」
寝ている諏訪子の横で呟く

「あの時っていつのことなんです？」

「はるか昔さ、俺からすれば数日前のことだが、君たちにとっては
6000年ぐらい前かな？」

「6000年！？そんな昔に？何をしに行ってたんですか？」

「間違えてだよ。あの青い箱はそんなに正確じゃないことが多いか
らね。」

「では、ここに来たのも間違えて？」

「いや、ここには自分の意志で来たよ。この後起こる大和の神々との
戦いを見物しにね。」

「なら、あなたはどちらが勝つてどうなるかも知っているんじゃないんですか？」

「やっぱり頭いいみたいだな。」

「ああ、知ってるけど言わない。未来を知ったところで大きくは変わらないし、第一未来がわかるなんて面白くないだろ。」

「そうですよね。結果を聞いたところで何も変わりませんからね。」
「そうだな、あの強さなら大体の神なら鉄の輪だけで倒せるだろ。結局は負けるが、八坂の神様との一騎打ちにしてやりたいものだ。このくらい介入しても大丈夫だろ。結果は変わらないし変わるのは過程だけだ。」

諏訪湖

「ミシャクジ様とやらいるんだろ。少し話がしたい出てきてくれんか。」

「今湖のほとりに立ち、ミシャクジ様とやらの協力を取り付けに行っている。さすがにフォースフィールドで隔離するにしても残りの神を俺一人で相手にするのは無謀すぎる。」

「何だ……貴様は……」

湖の中心から大きな白い蛇が現れる。

「やあ、俺はドクター、君ぐらいの神になると俺のことは大体わかるかな？」

正直諏訪子はまだ誕生して100年と少ししか経ってないから能力も十全に使いこなせてない。使いこなされたら俺なんて目じゃないだろう、なんせ森羅万象の地を操れる「坤を創造する程度の能力」

だからな。

「貴様のことは諏訪子から聞いている。それ以上のことは少ししかわからん。」

この神様でも限界があるのか？今度天照大神に会いに行ってみよう。この時代ならまだいるだろうし

「一つ頼みごとがしたい。諏訪子そして、ここの民のためだ。」

「一つだけ条件がある。貴様、私と戦え。そして、貴様の力を見せる。」

力試してか……

「よし、行くぞ！人間の力見せてやろう。」

翌日

ガン、ガン

「はーい、どういたしましたか？」

本殿の入り口をたたく音がする。

ガラ、ガラ

「え？どうしたんですか！？どくたー？おーい」

「大丈夫だよ。見た目ボロボロだけどそうでもない。普通の人より

頑丈だからね。」

「でも、どくたーがここまでやられるなんて……妖怪ですか？」
夏苗さんが警戒を強めるが

「妖怪じゃない、ちょっとミシャクジ様と戦っただけだよ。あ、これ諏訪子には内緒ね。」

「ちょっとじゃないですよ！？こっちに来てください。」
とグイグイ引っ張られ霊力で手当てされた。霊力万能すぎる。俺も使いたいのが前に永琳に

「あなたの霊力はほとんどゼロに近いわね。こんなの一秒でも浮くだけで気絶よ。」

とか言われてしまったのでやめておこう。

そして、いつものように食卓を囲む。

「どくたー！昨日はどこ行ってたの？いくら強いからって妖怪もいるんだよ。気を付けないと。」

でも真相を知っている俺と夏苗さんは苦笑いして諏訪子を見る。

「ど、どうして、そんな目で私を見るのさ。もうまた、二人して私をいじめるよ。」

「さあ、もう時間がないぞ。真面目に諏訪子、どうするんだ。戦うのなら手は貸してやる。降伏するとしても、俺は何も言わない。お前の収めている国だ。未来はお前が決める。」

答えは分かっているけどもここで本人の口から聞いておかないと、部外者が勝手に進めてもいけないしな。

「私は戦うよ。此処の民のためにも」
そう諏訪子が言うので

「じゃあ、俺も手伝ってやろう。」
さあ、本格的に諏訪大戦の開始だ。

次回へ続く！

戦の前（後書き）

諏訪子やら加奈子っていう神っていつ生まれたんでしょう？しっかりと書かれていないので分かりませんので適当に決めさせていただきます。

では、感想よろしくお願いします。

時の王

さ、準備は万全だ。今日、大和の神が来るらしい。今俺はターデイスのモニターで、大和の神々を見ている。強さはそこまでないにしろ大軍勢だな。よし、俺もそろそろ動きますかね。

数時間前

「じゃあ、私は行ってくるよ。」

と諏訪子が横にいるミシャクジ様と一緒に大和の神々との戦いに向かおうとしている。

「わ、私も、「駄目だよ。夏苗は人間じゃあ強いけど神と比べちゃ全然だからね。それに比べてどくたーは……ほんとに人間？」

一回死んで、ミシャクジ様と戦えてもまだ人間だと思う……たぶん。

「俺は準備があるから」

とターデイスの中に入る。

ガチャ

「こんな小さい箱に入って何するんですか？」

と夏苗さんも中に入ってくるが……

「な、何なんですかこれー！？」

と目を回して倒れてしまった。

「まあ、予想外だがこれでいいだろ。」

夏苗さんを居住スペースのベッドに寝かしターデイスを作動させる。

「さ、大仕事だ。」

諏訪子SIDE

「ミシャクジ様頼むよ。」

私ひとりじゃどうにもならない。ミシャクジ様は体を何千の蛇に分けられる。これで数だけは稼げてても大將は相手できない。だから私が相手しないと。

「任せろ。」

ミシャクジ様は頼もしいね。それにしてもどくたーは何してるんだろ？まあ、あんなに強いとしても、神がこんなに居ちゃあ勝ち目ないと思ったのかな？それでもどくたーや夏苗が死なないのならそれでいいや。

本殿からあの長い階段を下り鳥居のある地点に大和の神々はいた。

「さあ、答えを聞かせてもらおうか。」

中心にいる大將だと思っ注連縄を後ろにつけた女が前に出て言うてくる。

「私は戦うよ。それが私たちの選択だよ。」

そう強く言い放つ。どくたーに言われたしね。ここは私たちが収めてきた私たちの国だから……

「よろしい、そういう選択もあるだろう。だが、ならば戦おうか。」

と大和の神々が神力を開放するが、

ギョォーン！ギョォーン！

と私と神々の間にどくたーの青い箱が現れる。こうやって現れるんだ。

ガチャ

「ちょっと待った。ちょい待ち！」

どくたーが出てくる。何しに來たのさ、死んじゃうよ……

「ここで、大和の神さんたちに提案だ。」

「貴様、たかが人間で、我々神聖な神の戦いに割り込んでくる出ないわ。」

と後ろにいるいかにも下級っぽい神様が言っている。

「さあ、その女の大將さん提案、聞ukai？」

と何か言ってる他の神を無視して、大將に聞いている。

「提案って……何を言つもんだか、命令の間違いじゃないのかい？」
え？私と変わらない、いやもしかしたら私より大きい神力の持ち主がなんで、どくたーの言うことを聞こうとしてるの？

「そうかもしれんな。」

とどくたーは苦笑いするが

「なぜ、そんな人間の言うことを聞くんですか！」

「見てわからないのかい！あいつの乗ってきたこの箱、神力よりも

つと高密度の力を感じるよ。もし、これが武器なら私たちじゃ歯が立たないよ。」

それを聞き、啞然とする他の神々、私だってびっくりしてるんだから。何で気づかなかったんだろ？

「では、ここは一騎打ちとしてもらいたい。ここにいる諏訪子とあなたとのな。」

「仕方がないが、了承しよう。」

「では」と言い青い箱の中に入るとくたー

「良かったのですか？」

「いいんだよ。」

ガチャ

「さあ、あなたと諏訪子はこちらに」

というので青い箱から離れたところに私たち集めて、どくたーは青い箱の中に行き、何かを作動させた。

「さあ、これで隔離は完了した。外からの乱入はなしだ。」

「ああ、わかった」

「では、開始。」

私は自分の国を守るだけだよ。

SIDE OUT

「では、開始。」

というと同時に二人は戦い始めた。

「さあ、俺たちは外を相手にしようか。」

「だが、これで大丈夫なのか？」

ミシャクジ様とフォースフィールドの中で隔離された空間で戦っている二人を見ながら言う。

「ああ、これで完璧だ。」

「おい、貴様ら！何をした。」

とまたまた下級神が言うてくるが

「君たちのいる場所と戦っている場所は完全に隔離させてもらったよ。破るならそうだね……この太陽系を吹き飛ばせばどうにかなるんじゃないかな。」

地球を粉々にするほどの爆発も耐えるんだからこのぐらいだろう。

「そんな馬鹿な話があるか！」

と突っ切ろうとフォースフィールドに触れた瞬間、

ボウオ

「うわああああああああああああああああ」とその神が一瞬にして燃え上がった。

「貴様、何をした！」

「だから言っただじゃないですか。隔離しましたってこれは、単純な壁じゃないんです。莫大な力でできてる壁なんですよ。さっきそこで戦ってる神様が言っただじゃないですか、神力より強い何かがあると。それで壁を作ればどうなるでしょうね。」

そのほかの神も無理だとわかったのか、さっきの神のようなことはしない。

「貴様、何者だ。」

「時の王つてところだ。」

く！

次回に続

時の王（後書き）

ドクターフーで時の王と言ったのは暖炉の時でしたかね。話は変わりますがトーチウッド面白いですね。最近見始めたのですがジャックが見れてうれしいです。
では、感想よろしくお願いします。

夏苗と未来

「時の王ってとこかな。」

「な、貴様が時間を総べているだと……只の人間に、そんなことができるわけがなからう。」

「只の人間かは、お前程度じゃわかんねえだろうが、天照大神ぐらいいなればわかるんじゃないか？」

「貴様のような人間がアマテラス様に会えるわけがなからう。私たちでも会えんのに。」

「それはどうかな。」

別の神が

「貴様を殺せば、この妙な壁は消えるということだろう。」
また妙な考えを……

「そうか！そうだな。」

とか言いながら神々《バカ》が向かってくるので

「ミシヤクジ様準備はOK？」

「OKが何かわからんが準備はできている。」

「さあ、戦闘開始だ！」

数時間後

そろそろエネルギー切れでフォースフィールドが切れるはずだが

ブウォン

消えたか……決着は、相打ちかよ！少しでも歴史を変えるつもりが
やべえほど変えちまったようだな。まあ、いいや。

「どくたゝ疲れたゝ」
と諏訪子がくっ付く

「邪魔だ。で、その神さんこれからどうする。」
此処からは歴史道理になるように誘導しないと

「どうにかして信仰を分けたいと思ってる。方法はまた考えんとす
るよ。」

「ならいいんだ。で、こいつらどうにかしてくれないか。」
と、俺とミシャクジ様にやられた神たちに指をさす。

「このバカたちは連れていくよ。また、明日来るとするよ。それと
私の名前は八坂加奈子だからね。覚えておきなさい。」
と神々を引き摺って何処かへ連れて行ってしまった。

「諏訪子頑張ったな。」

「うん！頑張ったよ。」

「じゃあ、帰ろうか。」

と二人でターデイスに入る。

「わゝすごいね。ここ何で見た目より広いの？」
そうか諏訪子はここに入るのは初めてか。

「企業秘密だ。」

「えゝけち」

けちでも何でも言ってくれ、俺にタイムロードの科学なんてわかるか。

「じゃあ、出発、神社の本殿へ参りまゝす。」

「おゝ！」

ギューーン！ギューーン！

「着いたか。あ、夏苗さん忘れてた。」

螺旋状の階段を下り夏苗さんが寝てる部屋まで行く

ガチャ

「あ、どくたー何でこんなところに？」

あ、夏苗さんもう起きたんだ。

「いや、夏苗さん、青い箱に入った途端気絶したからここまで運んだんだ。」

「ここはいつたい……いや、そんなことより戦いは！大和の神々との戦いは！どうなったんですか。」

「相打ちだよ。相打ち、大丈夫だよ。諏訪子は無事だ。」

「よ、よかったです」

とへなへなとなり座り込む。

手を差し出しながら

「じゃあ、行こうか。」

俺の出した手を掴みながら

「はい！行きましょう。」

てなわけで本殿まで戻ってきたわけだが。

「よ！遅かったな。諏訪の神、そして、時の王」

何でもう八坂の神がいるんだ？

「その時の王つてのはやめてくれないか。俺の名はドクターだ。」

「わかったよ。どくたー」

「じゃあ、お二人さんは信仰の分け方でも考えてくれ。」

というと二人は真剣に話し始めるので

「夏苗さん、ご飯でも作ろうか。」

「はい！」

と二人で台所に向かう。

「夏苗さん、そろそろここを発とうかと思ってる。諏訪大戦も終わったしな。」

そろそろ発とう。次はどこに行くか決めてないけど。

「え？な、なんですか！ここはあなたの家なんですよ。これからもここで諏訪子様と私とあの神様も一緒に暮らしましょう。」

夏苗さんが血相を変えて言ってくる。

「大丈夫だつて、あの箱は時間を移動できるんだよ？俺が行ってから俺の時間で1000年経っても夏苗さんの時間じゃ戻ってくるるときには十秒も経ってない。」

「本当ですね？」

「ああ」

嘘だが仕方ない……

そうして結局史実と同じように守矢神社に統合して信仰を分けるらしい。介入するまでもなかったな。
じゃあ、そろそろ……

翌朝

「じゃあ、消えますか。」

とまだみんな寝ているであろう。時間にターデイスへと向かう。

「どこへ行くつってのさ。」 「そうだよ。行くのなら私たちに一言言ってから行きなよ。」

夏苗さんを除いた二柱の神様が言ってくる。何で気づいたの？神様だからか？

「短い時間でも同じ釜のご飯を食べたんだよ。神じゃなくてもわかるよ。」

と諏訪子が自慢げに答える。その貧相な胸を張ってもむなしいだけだぞ。

「う、うるさいよ!」

「時の王つてのは本当なのかい?」
加奈子が聞いてくる。

「まあ、見ていればわかるさ。神様つてのは寿命はないんだろ。ならまた会えるさ。」

「じゃあ、行くよ。」
と言いターデイスのドアを閉めようとしたとき

「待ってください!」どくた〜
夏苗さんが寝巻のまま走ってきた。

「どうした?」

「どうしたじゃないですよ。何で私には見送りさせてもらえないんですか。」

と涙目で言う。涙目やめてくれ。行きたくなくなるから。

「いや、決心が揺るがないように誰にも言っていなかったんだが、この二人は勝手に来ただけだ。」

「では、私もお見送りを、行つてらっしゃい。」

「行ってきます。」

ガチャ

「はあ、もつとここにいた方がよかったかな……多分今度来たときには夏苗さんは……」
仕方ないのかもね……

ターデイスを作動させる。

ギューーン！ギューーン！

「はあ、しみじみするのやめだ。月へ行こうか。」

夏苗SIDE

「行つてしまいましたね……」
あの時言つたことは多分嘘だと思う。だから私はもうあの人には会えないんだろう。

「行っちゃったね。」「ああ、行っちゃったよ。」
二人が言う。

十

九

八

七

六

五

四

三

二

一

「どくたーの嘔吐き……」

SIDE OUT

「ターデイスを探知しました。ここへ来ます。」

「6000年ぶりかしらね。ドクター？」

ギューーン！ギューーン！

月の都市のビルの合間に古めかしいポリスボックスが現れる。

ガチャ

「さあ、ソニックドライバーを返してもらわないとな。」

次回へ続く！

夏苗と未来（後書き）

そろそろ10000PVアクセスは2000人に達しますね。正直0でも仕方ないかなと思いましたがこれほどの人に見えていただいて本当にうれしいです。
では、感想よろしくお願いします。

追記

申し訳ありませんが書き溜めが手違いで消滅しましたので、次話は少し遅れます。

ソニックドライバー（前書き）

10000PV達成いたしました。皆さんご覧いただきありがとうございます。
では、本編をお楽しみください。

ソニックドライバー

ガチャ

「さあ、ソニックドライバーを返してもらわないとな。」
でも、まずは月の都市を探索させてもらおう。

そうして数時間月の都市を見て回ったが、技術レベルはニューニ
ーヨークと変わらないレベルだったな。車飛んでたし

「何でこの本に青いポリスボックスが書いてあるの？」
何かこれ「doctor who」とか書いてあるんだけど……店
員さんに聞いてみよう。

「ああ、これですか？今流行りのドクターフーですよ。知らないん
ですか？でも、この人実在するって噂があるんですよ。その話な
ら永琳さんが詳しいらしいですよ。」

おい、まて、永琳、もしかしてお前広めたか？俺のことは「知られ
ざる英雄」で忘れられたと思ってたのにこんな形で残しやがって…
…ヤバいぞ。ターデイス置きっぱなしじゃばれるぞ。

「そんな顔して、ターデイスがばれるとも思っただの？」
後ろから聞き覚えのある声がする。

「ターデイスなら私の研究所まで運んであるから大丈夫よ。」

「久しぶりだな。永琳」

「ええ、久しぶり、ドクター」

永琳に会い、そして、永琳の研究所まで案内してもらった。すごいな。トーチウッドみたいだぜ。

「永琳、なぜ君は俺のことを忘れなかったんだ？俺の「異常」《アブノーマル》で、忘れるんじゃない」

「私の能力言っていなかったわけ？私の能力は「あらゆる薬を作る程度の能力」よ、「異常」《アブノーマル》を打ち消す薬を作るぐらい簡単よ。」

と言って笑う。

「あ、ここに来た理由なんだが、君は俺のソニックドライバー持ってたままだったな。」

「肌に触さず持つてるわよ。」

とどこからか古びたソニックドライバーを取り出す。

「そう、それをもらおうと思って。」
有った方がいろいろと便利だしな。

「これは駄目よ。でも、私の作ったソニックドライバーならあげるわ。」

何で？まあ、もらえるんならいいけど。

「作るのに少しかかるから、そうね……これでも見たら？」
と妙なカードを渡してくる。

「これは何なんだ。」

Doctor Whoとか書いてあるから嫌な予感しかない。

「これをプレイヤーに入ればdoctor who がみれるわ。
本人の感想が聞きたいわ。」

「ちょっと待てこれは君が？」

「ええ、原案は私が考えたのよ。すごいでしょ。」
すごくねえよ。

「じゃ、ソニックドライバー頼んだよ。」

「ええ、任せて。」

と永琳は自分の研究室に入っていく

「じゃあ、これでも見ますか……」
とカードをデッキ入れ再生する。

数時間後

「やっぱ、面白いな。」

本家の感じが出てる。こっちのドクターは本家と同じように世界ではなく空間と時間を旅してるみたいだな。

「ドクター！ちょっと来てくれる？」

と研究室から声がする。

「わかった」

ガチャ

「こりゃ、すげえや。」

壁にはそこらじゅうに設計図やら何やらが貼つてある。

「出来たわよ。これが私特製のソニックドライバーよ。」

おい、何で11代目のソニックドライバーなんだ？君に渡したのは10代目の奴だったのに。

「あ、ありがとう」

「え？もしかして気に入らなかった？……」

そんな捨てられた子犬みたいな目でこちらを見るな。

「い、いや、少し渡したのと違うかったからびっくりしただけだよ。」

何が違うんだ？

「大きくなっちゃった理由はね、デットロックシールドも開けられるようにしたかったんだけど、無理だったから神力やら

妖力、それに能力でロックされたものも開けられるようにしておいたわ。」

「それはいい。ありがとな。」

「どういたしまして！」

ありがとって言うただけでどんだけ喜ぶんだ……

「これは、何なんだ？」

永琳の作業台にはソニックドライバを大型化したようなものが置かれている。

「ああ、これ？最近依頼があつたのよ。ソニックドライバより少し攻撃性が強くて物質を老化させられるわ」

おい、それって

「レーザースクリュードライバって言ったかしら？」

こんなもの何に使うつもりなんだ？

「誰が依頼を？」

そついうと永琳は依頼書のデータを探るが、

「依頼人は書いてないわね。調べておく？」
気にしないでいいだろ。

「いや、別にいいよ。」

「で、あなた、返事は？」
え？返事？

「返事？」

「そう、返事よ。返事！」

そう、どんとと近寄ってくるな。

「ちょっと待つてくれ俺からすればあれを聞いてからまだ半月ぐらいしかたつてないんだ。もう少し待つてくれ。」

早すぎというか俺と永琳じゃ時間の進み方が違うからな

「わかったわよ……でも、絶対にまた来なさいよ。」

「ああ、必ずな。」

今度は俺じゃなく君が来る番だけだな。

「あ、いいこと思いついたわ……」

と俺に耳打ちしてくる。ああ、そういうことか、ドクターフーがある此処だからできることだな。面白そうだ。

翌日

今俺はターデイスの中で永琳とモニターを見つめている。モニターには月の都市最大の広場が映し出されている。今日はちょうど休日だから、人はたくさん……準備は完了だ。

「じゃあ、準備はいい？」

「ああ、OKだ。」

そう言いターデイスを作動させる。

ギューーン！ギューーン！

「さあ、着いた。皆さんの反応を楽しもうじゃないか。」

ガチャ

「おつと、ここまでとは……」

ターデイスの周りが人で囲まれてやがる。ここまで人気なのか……テレビ局のレポーターみたいのもいるぞ。

「あ、あのあなたがドクター？」

レポーターらしき人がマイクを向け聞いてくる。

「ああ、俺の名前はドクターだが？」

「え！？ホントに？大ファンです！サインお願いします!!」
と周りにいるみんなが群がってくる。

「やつべえ、永琳後は頼んだ。」

と永琳を外へと追いやリドアを閉める。

「じゃあ、またね。」

「ああ、また。」

ギューーン！ギューーン！
ターデイスを作動させる。

月のニュース

「本日正午ごろドクターとターデイスが中央大広場にて………」

その日この話題が尽きることはなかった。

ターデイス内部

「そろそろ燃料補給しないといけないな。どこへ行こうかな。」

時空間の裂け目と言っても……そうだな。カルフォルニアのサンアンドレアス断層に行こう。あそこなら人も来ないし完璧だろ。

「では、100年後のサンアンドレアス断層へLET's go!」

ギューーン！ギューーン！

ガチャ

「ここで、24時間か……何もすることがねえな。」

ギニニユ

と空間に裂け目ができ、おい、まああれは……

「一緒にお茶でもいかがです？」

八雲紫《隙間妖怪》だ。

「いや、遠慮させてもらおう。」

とドアを開けて入ろうとするが

「おい、何をした？開かないぞ。」

境界を弄ったか

「その妙な箱の入り口は閉じさせてもらいましたわ。さあ、少しお話でもしません？」

まだ、あの胡散臭い笑みではなく普通の笑いだな。まだ、生まれてからそれほど経ってないのか？

「だから、勘弁だ。」

とさっきもらったソニックドライバーを取り出す。

「そんな棒で何ができるっていうんです？」

ギューン、ギューン、ギューン、ギューン！

ガチャ

「ほら、この通り。」

ほら、目を丸くして軽く放心状態だ。

「わ、私が本気で能力掛けたのよ！何で、そんな光る棒で、開くのよ」

とうなだれる。

「わ、わかったから、俺も此処から後1日は動けないからな。一緒にお茶でも？」

「ご、ご一緒させてもらっわ。」

と八雲の手を引きターデイスに引き入れる。

「何よ此処。境界でも弄ってるの？」

そんなことできるのは君ぐらいだよ。

「そんなことはしてないよ。こういうもんなんだ。割り切ってくれ。」

「ええ、そうさせてもらっわ。」

「では、下へ行こうか。」

「下？此処って地下があるの？」

「ああ、地下に居住スペースがある。そこでお茶しよう。」
と二人でらせん階段を下りる。

「さあ、お茶を飲みながら話でもしよう。」
と、俺はお茶を入れにキッチンまで行く。

「ねえ、あなた何で名前も知らないのに中へ？」
紫が聞いてくる。

「別に理由はない。暇だったからな。それに俺の名前はドクターだ。」

「私も名乗らないとね。私の名前は八雲紫よ。」

「君は妖怪だろ？まあ、俺の推測だが」
お、今回はうまく淹れたな

「何でそれを……」

「こんな断層の近くに人間がいるとは思えないしな、第一ここに人間が来るのはもう少し後だからな。」

紅茶にしたがよかったかな？

「まるで未来を知っているかの言い方ね。」

「ああ、知ってるんだ。」

「バカを言いなさんな。妖怪でもなく魔力や霊力もほとんどない。そんな人間が未来を知っているなんてありえないわ。」

ありえないことなんてありえないんだよ。

「君はこんな噂を聞いたことはない？100年ほど前に諏訪大戦があったのは知ってるよね。」

さすがに知ってるだろ。

「ええ、知ってるわ。って……もしかしてあなたは
思い至ったように驚愕する紫

「そう、俺はその場にいた唯一の人間、「時の王」だ。」

時の王ってなんか中二病ぽくっていやなんだけどな

「な！？あなたがあの時の王だって言うの？あの後消息が分からなくなっていたけど」

「あの後は月にいたんだ知り合いのところにで、ここにはこれの燃料補給にね。」

そうしてお茶しながら1時間ほど話した。

「お！燃料満タンじゃないか、やっぱり閉じる前の時空間の裂け目

は違うな。」

一日もかからなかったぜ。

「じゃあ、俺はそろそろ行くぜ。君はこの世界でやることがあるんだろ？」

「ええ、私は妖怪と人間の共存を考えているわ。このままいけば科学に妖怪は押し切られるわ。それを防ぎたいのよ。」

「それができることを楽しみに待っているよ。」

「ええ」

ガチャ

紫がターデイスから出ると同時に作動させる。

ギューーン！ギューーン！

「あいつにカレーを奢りにいかないとな。」

続く！

次回に

ソニックドライバー（後書き）

遅くなりまして申し訳ありません。書き貯めが消滅したりといろいろありまして遅くなりました。ソニックドライバーですが10代目のもいいですが11代目の方が好きでしたので変更いたしました。では、感想よろしく願います。

未来人

ギューーン！ギューーン！

ガチャ

現在はハルヒの世界、そして時間はあの世界崩壊の危機から3年前の七夕だ。で、場所は？

ガチャ

「どこ？」

と勢いよくドアを開ける。

「あ、ここは、あの東中の屋上じゃねえか。」
ここに「私はここにいる」が書かれるのか……

「じゃあ、早めに公園で待ってるか……今の時間は？」
とターデイスに戻り確認すると……5時ぐらいだな。キヨンとハルヒが会うまで4時間ぐらいあるな

「じゃあ、準備してる中学ハルヒにでも会つか……」
と屋上にかかっている鍵をソニックドライバーで外しながら言う。

そうして鍵を外して下まで降りると案の定体育倉庫の裏で何かを運んでる少女がいた。

「なによ。あんた」

おい、何でわかるんだよ。俺の近くにいる奴には何でか「異常」《

アブノーマル』が効きにくいな。

「こういうもんだ。」

とサイキックペーパーを出す。高校ハルヒなら通用しないだろうが
中学なら通用するだろう。

「へえ、警視庁ね。何でこんなところに？」

「いや、最近追ってる犯人の足取りがここでつかめそうだね。で、
君は何をしてるんだ？」

何か疑っているようだが、まあいいや

「私？先生に言われたことをやってるだけよ。」
平然と嘘を吐くなよ。いいけど

「手伝ってやろうか？」
暇だしな。

「ええ、お願いするとするわ。じゃあ、この石灰を……」
と言った具合で淡々と30分後ぐらいで済んだ。

「そろそろ、俺は行くぞ。」
とハルヒに言う。

「一つだけ聞いてもいい？」
何だ？

「この世界をどう思う？」

「この世界か？この世界は広いさ。何でもあるだろうよ。宇宙人、

未来人、超能力者、まだあったことはないけどね。だからこそこの世界は、ファンタスティックだ!」

「なんか警視庁の警部とは思えない感想ね。でも、嫌いじゃないわ。また会いましょ。」

ああ、必ずな。

そして、ハルヒと別れた後光陽園駅前公園に行ってそこで昼寝してたんだが……

$$\begin{array}{c} \lceil \\ Z \\ Z \\ Z \\ \smile \\ \smile \\ \smile \\ \smile \\ \smile \\ \smile \\ \lfloor \end{array}$$

「おい、起きてくれませんか？おい」
何なんだ、気持ちよく寝てたのに……

「誰だ、殺すぞ。」
「何なんだ。」

「ひい、すいません」
と声を上げていたのは朝比奈さん（大）だった。

「何やってんですか。朝比奈さん……」

「別にさん付けしなくてもいいですよ。あなたの方が年上なんですから。」

これで、朝比奈さんの年齢の幅が縮まったな。予測可能だな。でも、考えてみたら転生前も含めたら予測なんてできなくね？

「そうだったか？まあ、いいや、で？何の用だ？」

この朝比奈さんはこの時間でやるが多すぎるからな。

「あなたなら知ってるんでしょう？世界が今までにない規模で改変されていることを、そして私がキヨン君とともに世界を修正するということを」

「ああ、俺が日之影として教師やっていたときには、もう知っていたさ。まあ、確定事項だから変えようがないけどな。」

「ええ、確定事項ではありますが、あなたの存在自体は不確定事項ですからあなたが動けば世界は悪くもよくもなります。」
「そりゃな。この世界出身じゃないしな。」

「今は動かないさ、君に会いに來ただけだしな。次は3年後の12月18日に戻るさ。そこで、あいつを止めないとな。」

「そ、それは、確定事項を乱します。それでもやりますか？」
「確かめるように聞いてくる。」

「ああ、それが俺の選択だ。」

「そうですか。」

「言い終わると同時に」

ガチャリ

と妙な銃を構える。どっから出したんだ。それ、TPDDと同じで頭の中にあるつてもものなのか？これなら投影みたいじゃないか？

「それなら、あなたを止めさせてもらいましょう。」

「そんなもので、止められるとでも？」

「ええ、一応未来では最新式の武器ですから。」

と喋っている間にスーツの内ポケットからソニックドライバーを取り出す。

ギューン、ギューン、ギューン、ギューン！

バンッ

「まだその程度の銃じゃ殺せないな。」

「はあ、元から殺せるなんて思っていないですよ。それにあなたが時空改変しても悪い方向へは動かないでしょう？」

そう確信しているような顔で言ってくる。

「そんなこと全然考えてないがな、俺は俺の好きなように動くさ。」
考えるな、感じるんだってことですね。

「ええ、それで構いませんよ。では、三年後、いえ、また後で」と朝比奈さんはあのキョーンと朝比奈さん（小）がいるところへ行く。

「さ、やることやったし戻るか……」

と中学校の力ギを外して屋上まで戻った。

そしてあの地上絵？を見た。

「こりゃ、キョーン疲れただろうな。すげえや」

ここまで大きい書くのは結構疲れそうだな。

「ま、3年後へ飛びますか。」
とターデイスのドアを開ける。

ガチャ

「どうしよう……あの学校前に行くのはいいがターデイスは？」
じゃあ、北高の屋上にでも置いておこう。

ギューーン！ギューーン！

東中の屋上からポリスボックスが消える。

誰にも見られぬまま……と思っていたのだが……

「ねえ、あれなんだと思う？」

そこにはまだ中学生のハルヒと

「星じゃないのか？」

朝比奈さん（小）と時空転移してきたキヨンが

「いや、違うわね。一瞬だけど箱みたいなのが見えたわ。」

「見間違えだろ。」

「そうかしらね？」

キヨンSIDE

アイスピックが何やらというプロローグは飛ばしておいて、さる1
2月18日、何者かによって世界が改変されたらしい。まあ、俺の
知る限りそんなことができるのは天上天下唯我独尊、我らがSOS

団団長涼宮ハルヒしかいないんだが、朝比奈さん（大）によるとハルヒではないらしい。

「おい、長門犯人は誰なんだ？」

そう、長門が犯人だったさ。あの長い夏休みを過ごしたせいでおかしくなったんだと

そして、世界を元に戻すため朝比奈さんとともに三年後、俺から今の現在、世界がおかしくなった地点、12月18日の早朝、北高前に向かい、長門が改変するのを待った。

「よう。」

不自然じゃないように

「俺だ。また会ったな。」

ぼろが出ないように話しかける。

「キョンくん！危な……！きゃあつ……！」

と朝比奈さんの声が聞こえると誰かが物陰から飛び出してくる、またそれと同時に

ギョォーン！ギョォーン！

何やら聞き覚えのある音がする。そう思い後ろを振り向くと

あのドクターとやらが乗っていたポリスボックスが回転しながら突っ込んでくる。

「うお！あぶねえ」

としゃがむと俺はギリギリ避けれたが物陰から飛び出した誰かがポリスボックスに当たり吹き飛ばされる。

ガチャ

横転しているポリスボックスから見覚えのある顔の男が這いつくばって出てくる。

「あゝ死ぬかと思った……」
それはこっちのセリフだ。

SIDE OUT

次回へ続く！

未来人（後書き）

消失は原作でもそれほど長い話ではありませんし3話になるかならないかと言ったところですよ。一つこれは設定ミスなのですが、「月へ」の時朝倉を午前3時に北高前に送ってしまっているのが世界が改変されるのが4時過ぎですので一時間近く北高前で待機していることになってしまいます。

それはそれで面白いですけどね。

では、感想よろしく願います。

修正と犠牲

「あゝ死ぬかと思った……」

煙を吹き出しているターデイスのドアから顔をだしそう呟く。

こうなる原因は去ること30分ほど前だ。

30分前

ガチャ

「どうしよう……あの学校前に行くのはいいがターデイスは？」
じゃあ、北高の屋上にでも置いておこう。

ギューーン！ギューーン！

ターデイス内部

「じゃあ時間設定は、時空改変直後で、っと」
ターデイスを弄りながら言う。

「到達は世界を移動するわけでもないし、すぐにつくだろ……」
世界じゃなく時間移動と空間移動だけだからな。

そう樂觀視し、椅子に座り到着を待つて1分ぐらいたった時……

バチィ！ドオン、ビジジィ！

なぜかターデイスの中心部から火花が飛び散り、移動が不安定になりやがった。

「おい、おい、勘弁してくれよ。」

とモニターを見ると……何なんだよこの時空震、

「あ、世界改変時つてハルヒの世界だと時空にまで影響を及ぼすん」と最後まで言い切る前に

バァン！

と音を立ててモニターがブラックアウトした。

「ちつと、まずいぞ。マズイ！」

ガダン！

「揺れが少しおさまったか、時間自体は目標の時間についたようだな。」

で？場所は？

ドォゴォン！

「ヤバいな、何かにぶつかったぞ。おおっと、こりゃあ横倒しじゃねえか。」

そして、ターデイスの中心部を蹴り、ドアを掴み顔を出す。

「あゝ死ぬかと思った……」

そして、今に至るというわけだ。

「何やってるのよ……せつかくシリヤスムード出してクライマックスだったのに。」

と吹き飛ばされた何かが起き上がりながら言う。

「何かじゃないわよ。涼子よ。朝倉涼子。」
自己紹介ありがとうございます。

「いや、すまん。時空震の事すっかり忘れててな。時空震の中心を突っ切ってきたから……ターデイスもこの状態だ。」
と、煙を吹きだしているポリスボックスに指をさす。

「え？まさか、あの時空震の中を……そんな馬鹿な……」
ちよつと、朝比奈さん頭抱えないでください。そんなにすごいことなの？

「あんなのに巻き込まれれば人ひとりなんてともかく、銀河一つでもたやすく飲み込むほどのエネルギーを秘めていたんですよ！？それをあなたはこれで中心を突っ切ったなんて……」
まあ、ターデイスだし当然じゃないか？ぶっ潰れてるけど。

「じゃ、仕切り直してことで……」
固まっている消失長門とキヨンに向けて言う。

「あ、ああ」
とキヨンは修正プログラムの入った銃を構えると

「そうさせるわけにはいかないわね。」
と朝倉はキヨンへナイフを向け人が捉えきれぬギリギリの速度でキヨンへ向かう。

ザクリ
と何かにナイフが刺さる音が鳴る。

「はあ、いつも何でこう心臓のところばっかなのかね？」
何で？前に妖怪とやった時もここに腕貫通してたよね。

「な、なんであなたが……」
と涼子は後ずさりながら言う。

「ここで俺のこの命最後の講義だ。心して聞けよ。」

「何言つてやがる！は、早く止血を」

「そんなことしても無駄だって、まあ聞けよ。この世界、この時間での確定事項は誰かが刺されることだ。それは誰でもいいキヨンおまえでも、朝比奈さんでもな。そこで俺は本来いるはずのない俺が刺されれば、確実に誰も死なない、本当ならお前が刺されていたんだぞ。死ぬ可能性も無きにしも非ずだからな。」
安全策を取らせてもらった。

「な、」

何かを、キヨンが言おうとした瞬間、キヨンの顔にナイフが掠った。

「おい、朝倉！何するんだ。」
キヨンが叫ぶが

「も、もうドクターは助からないのよ……なら私は私のすることを最後までやり遂げるだけ。」

と今にも泣きそうな顔でナイフをふるうが

「……………」

いつの間にか現れていた正常な長門が朝倉のナイフを掴んでいた。

「そんな、なぜ？あなたが……あなたが望んだんじゃないの？……今も……どうして」

涼子は驚愕しているがこれも確定事項だしな。そろそろ血の量がヤバくなってきたな。

「じゃ、そろそろ俺もヤバイし……」

と言いターデイスの方へ歩き出す。

「あ、手伝いましょう。」

一人だけ冷静な朝比奈さんが言ってくる。

「朝比奈さん？」

「はい？」

「あなた俺が死んでも死なないこと知ってるんでしょう？」

「知っていないけりや私はこんなに冷静じゃいられませんよ。」
そして、ターデイスの上までのぼり

「長門よ。最後に言うておく、涼子に普通の生活をさせてやってくれ。行動と能力にプロテクトをかけておけば十分だ。涼子、ファントスティックな人生をな。」

と言い放つとそのまま横倒しになったターデイスの中に入っていく。

「ドクタアアアアアア」

と涼子の声が北高の前に響き渡った……

ギューーン！ギューーン！

ターデイス内部

「これはヤバイ……」

最後の力でソニックドライバーで、ターデイスを作動させる。

ギューーン！ギューーン！

「はああ、終わったぜ……」

言い放った瞬間、俺の体から光が飛び出す。そして、ターデイスの被害も増していく……

「おつと、再生終わった？」

と体の輝きが消えると同時に飛び出していた光も消える。

「これはひどいな……」

ターデイスの中はあちこちで機器は破損、火花が飛び散っている。

「現在位置を調べないと……」

とソニックドライバーでモニターを動かす。

「おい、動けよ。動け動け。」

ウィーン

おお、動いた。現在位置は東方の世界まで戻ったようだな。えゝ時間は、713年4月24日午前2時だな。場所は、平城京上空500メートルだ。

「おい」

バン、バン！

とモニターをたたくが外の画像がまったく見えない。

「おい、このままじゃ墜落するぞ！」

とある屋敷

「ふふ、あれがここに来るなんてね。面白くなりそうだね。」

黒髪の美少女が大きな屋敷の縁側で月に照らされながら回転して飛んでいる妙な箱を見つめて言う。

「もう、夜中ですよ。お体に触りますぞ。輝夜姫」

次

回に続く！

修正と犠牲（後書き）

二つ目の消費です。正直再生の表現の仕方に困ってます。なので簡略化いたしました。下手に書くといけないわからなくなりそうですので、感想よろしくお願いします。

竹の姫

ギューオン！ギューオン！

いつもとは違う作動音がターデイスの中に鳴り響く。

「おい、このままじゃ墜落するぞ！」
そういつた傍から墜落し始める。

「戻れよ。おい、これじゃあ何処かの屋敷に突っ込むぞ。」

と慌ただしく壊れていない機器を弄り何とか飛行を安定させる。

ギューーン！ギューーン！

「はあ……ひとまずは……」

ガアンツ

と大きな音が鳴りターデイスの作動音が消える。

「墜ちる。墜ちるぞ！墜ちるぞおおおおおおお」
そしてターデイスは垂直にどこかの屋敷へと墜ちていった。

ドゴオン

と何かを突き破るような音がした後ターデイスの落下が止まった。

「止まったか？……外に出る前にここの修理が先だな……」
メインルームの惨状を見て言う。

外

「おい、何事だ！」

と屋敷の支配人らしき人が声を張り上げる。

「申し訳ありません…ですが、空から降ってきたものが屋根を突き破っておりましてそうすればよいものか」

「危険があるかもしれん。周りを兵で囲め。」

「は」

てな感じで周りが包囲されちまったわけだが

「おい、この箱の中に誰かいるのなら出てこい。」

ターデイス内部

「うーん、ここはこう繋いで、おお！モニターが点いたぞ。」

え？また囲まれてる？まあ、当然だな。夜中に屋根突き破って妙な箱が落ちてきたらこんな反応だろうしな

「おい、この箱の中に誰かいるのなら出てこい。」

少しほかの奴よりも前にいる陰陽師のようなやつが言う。

「無視でいいだろ。修理に時間かかりそうだし。」
とモニターを見ながら作業を進める。

数時間たち日が昇り、ターデイスは庭へと運び出されていた。

「これどうなさいますか？旦那様」

「これは私が明日輝夜姫への献上品として持っていくからな。持つていく準備をしておけ。」

へ？輝夜姫？この時代なの？

「わかりました。」

おい、輝夜姫に持っていくの？これを？

夜まで修理していた……潰れすぎだろこれ、一応動かせるようにはなったけど後で掃除しないとな。

「そろそろ、外に出てみるか。」

もう夜中だし、大丈夫だろ。

ガチャ

「ひい！」

となぜかドアを開けたそばには黒髪の女の子が

「え〜と、何やってるの？」

「そ、それは、貴方も一緒じゃないの？」

「いや、俺ここに住んでるし」

「え？じゃあ、天からって落ちてきたってホントなの？」
と聞いてくるので

「天つてのが空や宇宙のことならその通りだな。あ、このこと黙っててくれないか？」

ばれると輝夜姫のところまで運んで行ってくれないからな。

「なぜです？天人だっていえばそれ相応の歓迎をしてもらえますよ。もしかして、貴方も輝夜姫に？」

「いや、輝夜姫に少し訊きたいことがあるだけだよ。」
と言ったところで

グウウ

と腹の虫が鳴る。

「すまん。少し食べてなかったんだな。」
という

「あ！何かもらってきますね。」
と屋敷に走っていく

「お、おい待ってく」
と言い終わる前に屋敷の中に入って行ってしまった。

「はあ、何でも話も聞かないんだ……」

と五分ぐらいすると少女が戻ってきた。

「こ、これでいいですか？」
とおむすび数個を渡してくる。

「ああ、ありがとう。じゃあ、俺は少し中でやることから。」

「え？でも、こんな狭いところで何するんですか？」

「まあ、企業秘密だ。」

と言いながらドアを閉める。

ガチャ

「あ、名前聞いてないじゃん。」

ガチャ

と開けると屋敷に入ろうとしていた。

「おい」

「はい？どうかいたしましたか？」

「君の名前は？」

「妹紅、藤原妹紅です。」

そして翌日

ガラガラと揺られながら俺はターデイスの中で輝夜姫の家につくの
を待っている。

「遅いな、下で寝てるか……」

下の階まで降りてベッドで寝るか。

「おい……まじかよ」

下りるとメインルームよりもひどい惨状が……

「こりゃあ、時間がかかるな。」

仕方ないのでモニターで外を見ながら過ごすことにする。片付けはまた永琳や涼子たちと会ったときに手伝ってもらおう。一人じゃ無理……

「お、ここが輝夜姫の屋敷か、昨日の子が藤原妹紅だっていうならこのおっさんは、藤原不比等だってことだ。」
てことは、出される難題は「蓬萊の玉の枝」とやらだったな。妹紅へのお礼としてとってきてやるか……

外

「輝夜姫よ。今日はこの物珍しい空から降ってきた青い箱を持ってまいりました。」

輝夜姫は顔も何も幕に隠れて見えない。

「その箱はどこにあるのかしら？」

「は、ここに」

とターデイスを召使に持ってこさせる。

「な、これをどこで？」

え？ やっぱ輝夜姫知ってるの？

「昨日私の屋敷に降ってきたのです。何かはわかりませんが特に危険はありません。」

「ありがとう。今までもらったもので一番うれしいわ。」
とかぐや姫が言うと不比等は満足げな顔で

「ありがとうございます。」

「褒美に私の素顔を見せましょう。ばあや、幕を」というと脇にいたおばあさんが幕を上げる。

「な、なんと美しい」

と不比等が声を上げ周りの召使もざわめく

ターデイスの中から見ている俺も

「おお、こりゃあ、話題になるわけだ。」

永琳や涼子たちも普通と比べれば超ハイスペックな美少女だがそれの上を行くなこれは……まあ、美しいだけだ。

こんな会話をした後ターデイスを残し、不比等たちは帰って行った。

え？なんで輝夜姫近づいてくるの？

「いるんでしょ？ドクター」

やっぱり見ていやがったか……

ガチャ

「君とは初対面だと思うけど、一応俺はドクターだ。」
と名乗ると

「すごいわ！本物のドクターだわ！資料では500年近く前に現れたって書いてあったけどその時の写真と全く一緒ね！」
となぜか抱きついてくる。

「おい、やめるバカ。」

お前は、見た目だけは異常にいいんだから抱きつくな！満面の笑みで抱きつくな！

「なぐに？顔赤くして、永琳が泣くわよ。」

え？永琳？」

「永琳？なぜ君が永琳のことを？」

「だって月での私の教育係は永琳よ。あなたの話もそこで聞いたんだから、いつもいつもあなたの話になると永遠のようにしゃべり続けるわ。」

と顔を青くする。

「そうか……」

「あ！あなたは何しに来たのよ？もしかして月の使者？」

「いや、月の使者って？俺はここに墜落しただけだ。」

「え？不比等が言ってた空から落ちてきたっていうのはホントなのね。でも、この箱って宇宙最高の船じゃなかったの？」

「まあ、それでも損傷することもあるってことだよ。なんなら見てみるか？」

とターデイスのドアを開ける。

「何よ此処……何で！こんなにボロボロなのよ！」
とターデイスの中で輝夜が叫ぶ

「だから言っただじゃん。墜落したって」
一応動くけどフォースフィールドの展開は無理そうだな。

「で、あなたは後どうするの？」

「ここで修理してるよ。何かあったら来てくれ、これがこのキーだから」
とターデイスのカギを渡す。

「わかったわ。じゃあまた来るわね。」

ガチャ

「じゃあ、修理しますか……」

次回に続く！

竹の姫（後書き）

遅れましたが19話です。

これから11月中は少し投稿が遅れますので、ご理解いただくと嬉しいです。

竹取物語と少し矛盾が起こるかもしれませんが、できるだけ矛盾なく進めたいとは思いますが、では、感想よろしく願います。

晩御飯

「修理は後二日あれば終わるな……でも、エクストラポレーターは本体が焼き切れていて使い物にならないな。」
過剰なエネルギーでも流れたか？

修理をして一日を過ごした、下のフロアは居住スペースのキッチン周辺だけ片付けた。他は無理……

「あゝ腹減ったな……何か作るか。」
と何を作るか考えていると外から

「ドクター入るわよ。」

ガチャ

「どうした？何かあったか？」

「いや別に？そろそろあなたおながすいてる頃だと思って。地球の食事もいいけどやっぱりたまには普通の食事もしたいじゃない？要は集りに来たのよ。」

まあ、食材はいっぱいあるけどさ

「いいけど俺料理できないぞ？」
できるわけないじゃん

「え？じゃあ、どうするつもりだったのよ。」

「今まではもらったり……ん？もらったばかりじゃね？」

長門に永琳……そして、妹紅にまで、あれ？自分で全然作ってないな……

「何してるのよ……」

「あ！いいこと考えた！輝夜！作ってくれないか？」

「え！？そん「月の姫なんだしそのぐらいできるよな？」

月の姫だし、それに永琳が教育係だし、そのぐらいできるだろ

「う、うん、わかったわ。この蓬莱山輝夜に任せなさい！」

「じゃあ、期待して待つてるよ。材料はどれ使ってもいいから」と居住スペースのテーブルで座って待つ。

一方輝夜は……

「これどうやって使うのよ……」
キッチンで悪戦苦闘していた。

5時間後……

「さあ！できたわよ！」

輝夜がやっと満足げな顔で戻ってきた。

「遅い……遅すぎる。さつきから5時間も経ってるぞ。」

「おいしい味には時間がかかるのよ。」
と輝夜が差し出したのは……おにぎりだった。

「おい……5時間でこれか？」
おにぎりって……おにぎりって

「だって私料理なんかしたことないんだもん！」

「おい、なら最初に言えよ、もってもう夜中じゃねえか。おじいさんたちには言ってきたか？」
と聞くと輝夜は顔を青ざめ

「マズイわね……滅茶苦茶マズイわよ。」

「さ、さつさと食って帰るんだな。」

「いただきます。」

「いただきます。」

こんな風に誰かと食べるのは諏訪子のところ以来かな？

「お！おいしいじゃん。」

「当たり前でしょ！なんせ月の姫なんだから！」

とおにぎりを二人で食べて、輝夜は

「じゃあ、帰るわね。今度は、ちゃんと料理作ってあげるから。」

「期待せずに待ってるよ。じゃあ」

ガチャ

「あいつ怒られなかったかな？」

そのあと

屋敷では

「こんな遅くまで何をやってたんじゃ！！！！！」

「ごめんなさい」

と聞こえてきたのは内緒だ。

翌日

「こりゃあ、これからはフォースフィールドだな。」

エクストラポレーターをどうにか直せないか試行錯誤していると外が何やら騒がしい。

「何かあったか？」

とモニターで見るとちょうど

「お、不比等の連れの中に妹紅いるじゃん。会いに行こう。」

ガチャ

とドアを開け妹紅に会いに行く。

「よ！」

と妹紅に気付かれないように限界まで薄めてる「異常」を最大まで高めて近づく

「うにゃあ！」

「何変な声あげてんだよ。妹紅」

「あ、貴方ですか。びっくりするじゃないですか。もう！」

「すまん、で、こんなところに何を？」

妹紅が言うには

『私の言う物を持って来ることが出来た人にお仕えいたしましょう』
と輝夜姫が言うと言にはよくここに来る五人が集まった。

でその中の一人が妹紅の親の不比等だったってわけらしい

「それで？その難題ってのは何だったんだ？」

「お父様のは『蓬萊の玉の枝』を取って来いと」

「この時代の加工技術じゃ再現は無理か……」

「え？何を……」

「いや、こつちの話さ。ちょっと用があるからまたな。」

「は、はい」

と少し会話をした後、輝夜のところに行き

「輝夜」

「何？」

「少し出かけるから。」

「え？ちょ、ちよつと待ちなさいよ」

答えは聞いてない！

ハルヒの世界でカレーを奢るついでに蓬萊の玉の枝のレプリカでも作ってもらうか……

ガチャ

ターデイスへと戻り。

ターデイスを作動させる。

ギューーン！ギューーン！

「なにこれ………」

またまた見られていることも知らずに……

次回に続く！

晩御飯（後書き）

少し短いですが勘弁です。輝夜姫の時代の美人って今の美人と違って話を聞いたのですがそうだとすれば輝夜姫ってもしかして今だと……
では、感想よろしくお願いします。

カレーと生存（前書き）

遅くなつてしまい申し訳ありません。では、お楽しみください。

カレーと生存

ギュイン！ギュイン！

ガチャ

「あ」

ドアを開けると壁だった……

ガチャ

ギュイン！ギュイン！

ガチャ

「よし、着いたな。」

ハルヒの世界、光陽園駅の近く、商店街の裏路地にターデイスを止めている。

「まずは、っと……」

と北高へ行くこうとすると

リン、リン、リン、リン

とポリスボックスについている電話が鳴りだす。

「え？これ使えるの？」

使えないんじゃない？

ガチャリ

と受話器を取り

「はい、もしもし?」

「あゝ聞こえていると嬉しいんだが、ドクターか?」
え? 誰?

「えゝと、どちら様で?」

「おお!生きてたか!長門があの傷じゃあ5分と持たないといつてたのにな。」

そうか、お前は……

「キヨンか……で?何の用だ?」

「ああ、本題に入ろう。一つ頼みたいことがあるんだ。あの日以来朝倉の様子がおかしくてな、話しかけても反応ないし、ずゝと死んだような目だな。」

そりゃ酷いな……そこまでとはな

「治せるのはお前しかいないから、死んだとは思っていたんだがダメもとで電話してみたってわけだ。」

「俺が死ぬ?笑い話にもならないな。いいぞ、ってか理由は違うが今この世界にいるしな。」

カレーと蓬萊と玉の枝のために来たけど、それだけじゃすぐに済んじゃまうしな。

「これからそっち行くから、部室にいてくれるか？」

「ああ、わかった。」

ガチャリ

じゃあ、結局北高か……

てなわけで北高までやってきた…え？どうやって入ったかって？そんなのサイキックパーパー見せりゃ一発よ。

「はあ、教育委員会からの抜き打ち検査ですか……」
面白そうだったので教育委員会にしてみた。

「はい、特に案内などは結構ですので、少し勝手に回らせていただきます。よろしいですか？」

「は、はい」

と言った感じで北高の中を自由に歩き回れるようになった。

テクテクと校内を歩き回るが、気づく者はいない。なぜなら、「異常」全開だからな、気づくのは俺のことを知ってるやつかそれか人間じゃないかだ。

「やっぱり、俺が授業したクラスの奴も忘れてるな。さすがに仕方がないか……」

「誰が仕方がないって？」

「あの日以来か……キヨン」

「ああ、ドクター」

と合流できたので部屋へと向かうと

「あなたは死んだはず。」

なぜか死亡宣告された。酷い……

「いや、死んでないし」

長門よ。会って早々死んだはずはねえだろ。

「長門、だから言っただろ？死んでないって」とキヨンが言うが

「ありえない。彼は完全に死にかけていた、助かる可能性は万に一つもなかった。」
そこまでか

「まあ、死んだってのも間違えじゃないけどな。だって、一応一回死んでるしな。」

「は！？じゃあ、何で生きてんだ？もしかして幽霊とかか？」

「いや、俺は後9回死んでも死なないんだ。」

何か二人が驚愕してるが無視して話を進める。

「そうそう、長門」

「何？」

「カレー食べに行かないか？前に約「行く。」

「じゃ、じゃあ、校門で待ってるから」

「わかった」

と言うと俺は部室から出てさっさと学校から出た。ハルヒに見つかるとうるくなことになりやしないからな。

そして

「あ、あれって、でも死んだはずじゃ……………」

結構俺って抜けてるのかな？またばれてるし…………でもここで見つかるわけには行かないのよな。

てなわけで

キーン、コーン、カーン、コーン

「待った？」

学校の終業時間まで待っていた。「異常」を全開にしていたから何も言われなかったがなかったら確実に不審者扱いだったな……

「その言葉も典型的だな。」

「古泉一樹がこういう時にはこういうのだと言っていたから。」
何言ってやがるんだ。あいつは

「まあ、いいや。で、この辺のカレー屋の場所なんて知らないんだが、長門は知ってるのか？」

というとき長門がポケットからひとつのメモを取り出す。

「これ」

何それ、なんか文字が敷き詰められてんですけど

「ここから半径10キロ圏内にあるカレー屋さんすべてに行くから」

「え？今もう夕方だよ？もしかして徹夜で？」
と聞くとコクコクと首を縦に振る。

「はあ、約束した手前だ。じゃあ、行こうか。」
と言い学校の前の坂道を下り始める。

「よし、確かめるために尾行させてもらっわよ。」

5時間後……………

「まだ、食べるのか……………」
食べすぎだろ。

「あと、5軒ある。お金は大丈夫？」

「ああ、お金については心配なくていいよ。」
だってATMをソニックドライバーで弄って適当に10万ぐらい出しておいたからね。

「あの二人どれだけ食べれば気が済むのよ……今で15軒目よ！もう財布の中身がないのに」

さらに1時間後……………

「もういいか？さすがに一軒につき三杯も食べられるとやばいんだが」
特に俺の財布が

「大満足」

「よかったさ。で、一つ頼みたいことがあるんだがいいか？」

「あなたには世界改変時の借りがある。私にできることなら」

「なら、ターデイスに来てくれないか？一つ作ってほしいものがあるんだ。」

「あゝ私の財布が……………」

そして、商店街の裏路地に停めてあるターデイスまで来てもらった。

ターデイス内部

「こいつを作ってもらいたいんだが、できるか？」
とモニターに蓬萊の玉の枝の予想図を表示させる。

「何か金属製の物があれば、すぐにできる。」

「少し待っていてくれ」
という螺旋階段を下り武器庫へと向かう。

「これでいいか？」
と適当にとってきた銃を長門に渡す。

「いい。」

というとき長門が何かしたのかその銃はとかされ再構成された。

「できた。これでいい？」
早すぎ。

「ああ、ありがとうな。」

「構わな」ドン、ドン
とターデイスのドアを叩く音がする。

「もしかして駐禁？」

ありえません。

ガチャリ

「あ、」

「あ、じゃないわよ。ドクター。」

朝倉がいた。何で？

「何か用か？」

「何か用か？じゃないわよ！あなたあの時死んだとばかり思っ
て……私がどれだけ悩んだかわかる！？」

「それはすまないことをしたな。でも、俺が死なないって涼子は知
らなかったっけ？」

あれ？教えたような気がするんだが？

「し・ら・な・い・わ・よ。それに死なないって何よ。」

あゝれ？永琳の時に教えてなかったか。

「俺は後9回死ねるんだ。まあ、そんなことはどうでもいい。で、

どうする？また一緒に来るか？」

一緒に旅するやつもちょうどいないしな。

「私は遠慮しておくわ。あなたが長門さんに言ったのよ？学校に通わせろ、だなんて。」

「じゃあ、今度こそお別れだな。」

「ええ。でも、あなたが生きてるってわかってよかったわ。」

「では、行くか。またな、涼子、長門」

いつの間にか外に出ていた長門と朝倉に向かってそう言いドアを閉める。

「ここでやることは一通りやったかな？」
とターデイスのコンソールの上に置いてある蓬萊の玉の枝のレプリカを見ながら考える。

すると

ゴン、ゴン、ゴン

「またか。」

ガチャ

「あなた、また来るのよね？」
と開けると涼子が聞いてくる。

「ああ、最低でもあと一回はな。」
予測だが

「なら、いいわ。また会いましょ。」

そう言い残すと何事もなかったかのように歩いて行ってしまった。
おい……

「俺も行くか……」

ガチャ

ギューーン！ギューーン！

輝夜SIDE

平安京

輝夜の屋敷

「これも偽物にございます。」

鑑定の結果を媼が私に伝えてくる。なんでこうも偽物ばかり持つてくるのかしら？これで5人全員が偽物を持つてきたことになるわね。

「あのお方も駄目ね。伝えておいて。」

「わかりました。」

あゝむう、ドクターたら、消えてから4か月も経つのに向に戻ってこない。

「どこに行ったのかしらね？」

とドクターに渡されたターデイスの合鍵を見つめながら言う。

すると急に合鍵から眩い光が飛び出す。

「ちょ、ちょっとどうしたのよ。」

と目を手で覆う。

ギューーン！ギューーン！

ターデイスの輪郭がはつきりとしてくると合鍵の光は弱まってくる。

ガチャ

「戻ったぞ、おい、輝夜！」

「戻ったぞ、じゃないわよ！あなたは急にいなくなるわ。5人は偽物ばかり持ってくるわ、カギは光るわ。」

あの鍵って光ったのか…

「5人は俺のせいじゃないだろ……それに、その結婚の申し込みってのは今からでもできるのか？」

「え？そりゃあ、難題の内のどれかを達成すればね、ってもしかし

てあなた……」

俺のやろつとしていることが分かったらしいな。

「そう。輝夜の読み道理だ。少し待っててくれ。」
「
と言い蓬萊の玉の枝を取ってくる。」

「これでいいだろ。お望みの「蓬萊の玉の枝」はここにある。さ、
月の姫よ。結婚を申し込ませてもらうぜ。」

次回に続く！

カレーと生存（後書き）

長く間が空いてしまい申し訳ありません。これからは、前ほどまではないきませんが一週間に2回最低一回は投稿したいと思いたいのです。よろしくお願いします。

それと一つ、一話と二話が今見ると気に入らないので近日中に書き直します。また見返していただけると嬉しいです。設定に関してはもう少しわかりやすく書きますが変更は致しません。では、感想お願いします。

監視装置へアンドロイド〈前書き〉

遅くなりましたがお楽しみください。

監視装置へアンドロイド

「これでいいだろ。お望みの「蓬莱の玉の枝」はここにある。さ、月の姫よ。結婚を申し込ませてもらうぜ。」

「えーーーーー！」

と輝夜は大きな声をあげた後フリーズしてしまった。

「おゝい、おゝい」

呼んでも返事がねえな。どうしよう……

とこんなことをしていると声を聴きつけたおばあさんが屋敷の方から歩いてきた。

「おゝい、輝夜やゝどうかしたのかい？」

すると急に輝夜は元に戻り

「え、えゝと、友人と喋っていたのよ。友人とね。」
なぜか友人を押すがどうかしたのか？

「えゝで、こちらの方がお友達？」
おばあさんが聞いてくるので

「はじめまして、輝夜さんの友人の日之影と申します。」

「日之影さんね。今後とも輝夜と仲良くしてあげて、この子この通り綺麗すぎて友人と言える人が居ないのよ。で、日之影さん今から暇ですか？今からお茶にしようと思うのですが、貴方も一緒にどうですか？」

特別やることもないだろうし、いいかな？

「では、ごちそうになります。」

てなわけで、俺は屋敷の縁側でお茶とお茶菓子を摘まんてる。あゝいいな、こんなものゝ

「お茶が美味しいなゝ」

てか、輝夜たちはどこに行ったんだ？俺の持ってきた蓬萊の玉の枝を持ったままおばあさんと消えちゃった。

「別にいいけどね……」

それにしても眠い……こういう縁側で昼寝か……おやすみゝ

「くクター！ ドクく！」
ん？なんだ？

「ドクター！、ドクター！、早く起きなさい！大変なのよ！」
このちょうどいい日差しでこの縁側、最高に気持ちいいのに……

「輝夜か、どうした。せっかく気持ちよく寝ていたのに……」

「それどころじゃないわよ！ちよつと来なさい！」
と連れられるまま屋敷の一室へと行くと

「おい輝夜、いったい何があつた！」

そこには、さつきまでのおばあさんは居ず、数字をつぶやき続けるおばあさんとおじいさんがいた。

「私にもわからないわ！ただおばあさんと一緒に蓬菜とたまの枝の鑑定をしていたのよ。そしたら、急におじいさんが来て「同期する。」なんて言いだして……」

輝夜は泣き出しそんな顔で話すが

「7 4 3 2 7 3 0 2 7 8 4 0 3 2 4 7 8 2 3 9 1 7 8 4 9 7 8 4 9
4 3 2 9 3 8 1 7 8」

おじいさんたちは謎の数列を話し続けている。

「こいつは……もしかすると……」
といいソニックドライバーを取り出す。

「え？ソニックドライバーで何をするつもりなのよ。」

「輝夜。おばあさんたちは好きか？」
これは聞いておかないと

「ええ、地球に流された私を拾って育ててくれたんだから
好きならなおさら言っていけないとな

「正直に言おう。おそらくおばあさんたちは人間じゃない。月に流
されたお前を監視するために作られたいわばがいアンドロイドだ。
俺はこれを止められるが、止めるとおばあさんたちが停止する。ど
うする、輝夜これはお前が決める。」

「……………わかったわ。やって頂戴。」

「いいのか？多分やればもう元にはもどせないぞ。」

「いいの。この地球でだけは自由に生きたいから。」

「わかった。」
というと同時におばあさんとおじいさんに向けてソニックドライバ
ーを作動させる。」

するとボンツと言う音がして二人は動かなくなった。

『監視装置が破壊されました。モニター展開します。』

「な、何だ。こんどは」

どこからか機械的な声が聞こえ部屋を中心にスクリーンが映し出さ

れる。

「え？永琳？」

『輝夜、聞こえていることを願います。これからいうことをしっかりと聞いて……』

あなた、もしくは誰かがおばあさんとおじいさんに化けた監視装置を破壊したときにこの映像が再生されます。

月でも破壊されたことが観測されているでしょう、次の満月の日、月の使者として私と十数人であなたを迎えに行きます。

でも、月には帰れない。いえ、少し違うわね。月ではあなたが飲んだ薬を上層部が欲しがっているのよ。

当然作った私が呼ばれましたが作らないと言ったとたん彼らは輝夜をいわばモルモットにして、蓬莱の薬を作り出すつもりもようなの。それに、地上で私の暗殺まで計画されているようだから、輝夜逃げるわよ。行くまでに何日有るかはしらないけれど、準備だけはしておきなさい。

じゃあ、長くて十数日後、短くて数日後にね。輝夜』
映像が終わるとスクリーンが消える。

「ド、ドクター、どうしよう？」

「いや、俺に聞くなよ。その前に次の満月はいつだ？」

それで計画の立て方を考えないとな。

「えーと、…………ふて…………よ。」

「え？」

「だから、二日後よ！」
え？早すぎだろ。

「後二日有るしまずはお墓でも立てるか。」

「…………ええ。」

人じゃないにしてもお墓は必要だからな。

「ふう…………疲れたぜ。」

基本的に俺が立てた。輝夜は使用人らしき人を連れて何処かへ出かけて行った。どこ行っただ……

「ドクタ〜援軍よ〜」

何かあったのか？援軍ってまさか……

「どうした？」

「だから、援護を頼んだのよ。藤原不比等に」
結局竹取物語と同じように無駄に兵を置くのか

「お前な……月の兵器と地上の兵器じゃ何十世紀以上もの技術の差があるんだぞ。地上の兵器が効くとも思っているのか？」
竹やりで戦闘機落とすようなもんだぞ。

「だ、だって、気が動転してて……ごめんなさい。」

「まあ、いいや。じゃあ、俺はターデイスを移動させてるから」

「わかったわ。」

俺はターデイスに戻り、庭にある土蔵に移動させた。これがあるとすぐにばれるからな。それに土蔵の扉もソニックドライバーで強化しておいた。少しだけど。

「ほう。今の月の都市はこうなっているのか」

今俺はターデイスのモニターで現在の月の都市を見ている。都市全体を広大なフォースフィールドで覆っている。おそらく光を屈折させて見えなくもしてあるんだろうがターデイスには関係ない。

夜になり、俺は縁側で月を見ながらお茶を飲んでいる。

「あゝ面倒なことになったな」

「面倒なら逃げてもいいのよ?」

「急にどうした? 輝夜。」

「別に何も無いわよ。ふと思っただけよ。あなたなら、あの船に乗って逃げられるのについて思っちゃって……なぜ私に付き合ってくれるのかなって?」

「理由は、友人が困ってるってのに助けられるっていうのに助けないってのもな。後味悪いだろ?」

「暇人ね。」

「ああ、自分でもそう思うよ。でも、そうじゃなきゃこんな当てもない旅なんてやってられないぜ。」

「そりゃそうね。………で……あの結……の申し込みは……今

……でも……」

え? 何だって? もう眠い……もう……駄目

「ドクター? ドクター? あゝ寝ちゃったかゝ別に良いかもね。この人と……」

次回に続く!

監視装置へアンドロイド（後書き）

書く時間がないので投稿のペースが一週間に一回になっていますが見ていただければ幸いです。

設定ですが一応書いてはありますが投稿するかは不明です。投稿された時は本当に時間がないんだと思ってください。

この作品のヒロインは永琳と輝夜です。（基本的にですが）では、感想よろしく願います。

竹取の終わり（前書き）

非常に長くなっています。切る場所を考えたのですがいいところ
がなかった。なのでこのままいきます。

では、楽しみください。

竹取の終わり

翌日なぜか俺と輝夜は肩を合わせて縁側で寝ていた。

「おーい、起きろー」

「ZZZZZZZZZZえ！へ、変なことしてないでしょうね？」
しねえよ。

「してないから安心しろ。それにここで普通に過ごせる最後の一日だ。有意義に過ごせよ？と言っても不比等と明日の話か」

「ええ、昼過ぎに来ると言っていたわ。兵は300人程度だって。それになぜか娘も来るんだって、なんでだろう？」
妹紅かな？

「じゃあ、輝夜は打ち合わせでもしておいてくれ。俺は娘さんとも遊んでるわ。」

史実道理に行くのなら打ち合わせなんて無意味だからな。

「ち、ちよつと待ちなさいよ。」

それまではターデイスでお菓子でも食べてようかな？

昼ごろになり、不比等たちがやってきた。予定道理妹紅も来たようだな。

そと、「知られざる英雄」を全開にして妹紅に近づく

「も〜こ〜う」

「うひゃああああ」

「久しぶりだな。妹紅、あの時はおにぎりありがとう。」

「貴方はあの時の……それよりも青い箱です！あれは何なんです？前この屋敷で会ったとき見ました。あの箱が消えていくのを、いたいあれは何なんです？」

また見られてたか……もつとしつかり周りを確認した方がいいな。

「じゃあ、見に来るかい？」

もうここまではれてるんだ。仕方ないだろ。

そういうと俺は妹紅を連れて土蔵の中までやってきた。

「そうこれです。」

「じゃあ、中を見るかい？」

「あ、はい。」

ガチャ

「此処がターデイス、見かけより中が広い。」

「な、たーです？何なんですかこれ？」

あれ？思ったよりも反応が小さいな。まあ、一度ターディスが消えるのを見ているからな。

「じゃあ、どうする？話は長引きそうだし、ここでお菓子でも食べていくか？」

「お菓子ですか？どんなのが」

この時代のお菓子と言えば砂糖が入っているものなんて値段が高過ぎて帝ぐらいしか食べられないんじゃないか？

「砂糖を使ったお菓子だ。甘いぞ。」

「いただきます！」

即答！？

「てなわけで、お菓子を食べている訳だが」

「いつふたいたれとしふっているんです？」

「口物を入れたまま喋らない！」

「もぐもぐもぐもぐ」

非常にお菓子、只のクッキーなんだがな。

「そんなにいっぱい食べると太るぞ。」

「食べ終わりました。」

早い！？

「これっていったい何なんです？」

「これは時間を旅するための物だ。実際は少し違っがほぼ同じだ。」

「時間！？もう貴方ならわかるような気がしてきました……」

「なんでだ？」

「だって、砂糖をこんなに使って……貴族それに、帝でもここまで贅沢には使えませんよ。」

「そうか？欲しいんだったらまだあるけど……」

「いただきます！」

即答！？

そんな感じに2時間ほど喋ったり食べたりして過ごした。ちなみに今の時間は午後4時くらいだ。

「そろそろ、終わっているだろうから外に出るか？」

「はい。」

外に出ようとするとターデイスに警報が鳴り響く。

「お、やっと発進したか……」

月の船が発進すると警報が鳴るようになっているからな。

ガチャ

「じゃあ、妹紅俺は輝夜のところに行くが君はどうする？」

「私は帰りますよ。少し食べすぎましたし。」

「わかったよ。じゃあな。」

てなわけで、今俺は不比等たちと屋敷の縁側で空を見上げながら月の舟が来るのを待っている。兵の配置は知らないけれどもね。

「で、君は誰なのかな？」

と不比等に聞かれたので

「私は輝夜の友人の日之影と申します。今後ともよろしく。」

「ああ。」

それにしても遅いな。月の船なら一瞬でレポートすることもできるし、そうしなかったとしても、遅くないか？

「遅いわね。もう7時なのに。」

「ああ。遅すぎる。ターデイスで確認したのは4時だ。技術力から考えて3時間はかかり過ぎだ。」

「ええ、「見えてきたぞ。」

不比等が声をかけてくる。それを聞き俺と輝夜は話すのをやめ空を見上げる。

「こりゃあ、時間がかかるわけだ。」

「ええ、ここまで凝っているとはね。」

そこには馬にひかれている神々しさを醸し出す馬車がこちらへと向かっていた。

「でも、それにしてもは挙動がおかしいぞ。ちょっと待ってる。」
「言い俺は庭に出て屋敷の屋根の上へと昇る。」

「カモフラージュだろうが、俺には関係ないね。」
「とソニックドライバーを取り出し。向かってきている馬車へと向ける。」

「本当の姿を見せてもらおうか。」
「作動させると今までのような馬車や馬は消え、なめらかな曲線で作られた宇宙船が姿をあらわす。」

「こつちの方が俺は好きだな。」

「つと」

「ドクター何をしたの？」

輝夜が尋ねてくるので

「本当の姿に戻しただけだ。あれは地上人をおじけつかせるための脅しだよ。」

先入観でも植えつけたかったんだろ

「日之影君！君はいつたい何を『ドオンッ』

不比等が喋り終わる前に月の船が屋敷の庭へと着陸した。

「おお、着陸したな。近寄ってm」

言い終わる前に舟の側面部からあたり一帯に衝撃が走った。

「うお！いったいなんだって……おい、不比等さん、大丈夫かよ。」
不比等が倒れている。いや、不比等だけじゃない、周りにいた兵士たちも全員だ。

「ねえ、どういことなのよ。」

輝夜は大丈夫なようだな。

「ひとまずは行ってみるべきだな。輝夜行くぞ。」

「えゝ行くの？」

「ハロー？ハロー？」

今俺は月の舟の側面をゴンゴンとノックしている。すると

ウィーン

とドアが開き、数人の銃のようなものを持った男と永琳が中から出てきた。

永琳……あの妙な服変えてなかったのか……

「輝夜、久しぶりね。」

「永琳も」

「久しぶりだな。永琳。」

「え！？なんであなたがここに。」

「し……俺がここにるのはばれたくないんだ。少し黙ってても
らえるか？それとソニックドライバー持ってるか？」

「ええ、わかったわ。」

と古びたソニックドライバーを手渡してくる。そうして永琳と話している

「貴様、何者だ！」

周りの男が聞いてくる。

「しがない旅人だよ。特になにもせんよ。」

「では、永琳様、そして誰だか知らんがここに居合わせたのが運の尽きだったな。死んでもらおう。」

「ちょ、ちょっと待った。死ぬ前に最後に一つだけ。」

「なんだ!」

「同じソニックドライバーを対向して作動させたらどうなると思う?」

「そんなこと知るか!」

「こうなる!」

と言い向き合わせにしてドライバーを作動させる。すると、周りに高周波がまき散らされ兵士たちがよろめき倒れる。

「さあ、こつちだ。」

と永琳と輝夜の手を引き土蔵へと向かう。

「ドクター?何であなたは大丈夫なのよ?」

と輝夜が聞いてくるが何を言っているのかよく聞こえない。

「え？なんだって？耳栓してるからよく聞こえないんだ。」
耳栓！

「ずるいわね。」
と睨んでくるが知ったことじゃない。

「土蔵にターデイスを隠してある。土蔵まで行くぞ。」

「危ない！！！」
と寝ているはずの不比等の声が聞こえたかと思うと

ビュンツ

と青い閃光が走り次の瞬間には不比等が輝夜をかばうように倒れていた。

「おい！不比等！大丈夫か！？」
返事がないな。出血の量もまずい

「早くターデイスまで運ぶぞ！急げ！」
と言い不比等を抱きかかえターデイスのある土蔵まで運ぶ。

「永琳、ターデイスの中で不比等を見ておいてくれ。俺は土蔵の扉を閉めてるから。」
と俺はドライバーで扉を完全にロックする。

ガチャリ

そこには、寝かされている不比等と固まっている輝夜、無駄だと言わんばかりに立っている永琳が居た。

「完全に心臓を貫いていてね……無理だったわ。」
永琳が誰に伝えるわけでもなく言う。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」
輝夜はうわ言のように謝り続けている。

ゴン！ゴン！

外では土蔵の扉が破られかけている。

「マズイな。行くぞ。」

と言い俺はコンソールまで走りターデイスを作動させる。

「ドクター、彼最後にこう言っていたわ。「日之影君、妹紅を頼む。」と……」

俺が妹紅と仲がよかったことを知ってたのか……

「そうか……すぐに妹紅所に連れて行ってやらないとな……」

と感傷に浸っていると

ゴンツと大きな音がしてターデイスが大きく揺さぶられる。

「おい！此処は時空間だぞ。時空震は起きてない、いったいなんだ？」

ターデイスは正常に作動してるのに

「あ、ドクター、一つ大事なことを忘れていたわ。」「急に思い出したかのように永琳が言う。

「何だ？早く言ってくれ。」「

「あの船、タイムトラベルできるのよ。」「

な、じゃあ、まずいぞ。こう喋っている間にも衝撃波は続きターデイスも揺れている。

「永琳、あの船は世界は越えられないんだよな？」「

「ええ、それは無理よ、ってまさかあなた……」

「ああ、世界を越えるぞ！俺は少し設定をしているか永琳はコンソールを弄ってミサイルから避けてくれ」

「わかったわ。」「

と永琳はコンソールを弄り始める。俺もモニターを見ながらコンソールを弄る。

数分間ミサイルを避けながら設定をした。これでつと、とりあえず

はこれで世界を越えられるはず、どの世界に到着するかは知らないけど

「よし！永琳、輝夜、不比等を抑えておいてくれ。少し揺れるぞ」と言つと輝夜と永琳は不比等を抑えに行った。

「行くぞ！」

とコンソールの中のレバーを下げる。と同時にターデイスがさつきとは比べ物にならないほどに揺れ、作動音も増す。

ギューーン！！ギューーン！！

ドン！という音と同時に作動音そして揺れも収まる。

「着いたぞ。どこかは知らないがな」

すぐに戻るから関係ないか……

「で、どうするんだ？隠れるのなら場所ぐらい探すか？」
そう尋ねると

「別にいいわ、もう月にいる段階から隠れる場所は考えてあるのよ。」

といい、永琳はターデイスを作動させる。

ギューーン！ギューーン！

ガチャリ

「此処か？こんな何もない竹藪が」

そう、ここには何もない只だっ広い竹藪が延々と続いている。

「ええ、そうよ。家ももうあらかじめ月から転送してあるわ。」

「えゝここに住むの？」

輝夜は不満そうだな。

「我慢しなさい。此処は高濃度の魔力の瘴気が立ち込めているから、中には入れないし衛星からでも判断できないわ。」

「わかったわよ。あ、ドクター不比等のこと頼んだわよ。」

妹紅のところまで届けないとな。

「ああ、わかった、任せとけ。じゃあな。」

と言いターデイスのドアを閉める。

てなわけで、妹紅の屋敷までやってきた。あゝ気が重いぜ。

「妹紅」

いつものように「異常」全開にして近づく……ちなみにこれは、俺たちが月の船から逃げてから数時間後である。

「うひゃあああ、またあなたですか、でもいいんですか？輝夜姫を守っているんじゃないんですか？」

「すまないな。本当にすまない。」

と言い俺は妹紅を抱きしめる。

「ちょ、ちよつとな、何するんですか？」

「お父さんは死んだ。月のやつらの攻撃から輝夜を庇ってな。妹紅は意味が解らないのかキョトンとしている。」

「助けたかったが、手遅れだった。」

歴史は変えられなかった……

「な、何でえ………一体なんで………お父様が」

妹紅はやつと意味が理解できたのか、急に泣き出す。

「すまない。」

「お父様は、どこに？」

と泣きながら聞いてくる。

「こつちだ。」

妹紅を連れてターデイスまでやってきた。不比等の遺体は居住区に山ほどあるベッドに安置してある。

「お父様~~~~~、」

妹紅は不比等を見つけると泣きついた。

「不比等は最期に妹紅をよろしくと言ったらしい。で、不比等はど
うする？」

「私が連れて帰ります。運んでもらってもいいですか？」
と妹紅は泣きやみ応える。

「分かった。」

妹紅とターデイスの螺旋階段を昇りながら話す。

「輝夜さんはどこに行ったんですか？」
妹紅が聞いてくるが

「残念ながら俺は知らないんだ。座標は輝夜の従者しか知らない。」

「そうですか……………あ、でもこれって時間を旅できるのならお父
様が死ぬ前に戻れば」
妹紅は賢いな…………

「無理だ。そこにはその時の俺もいるし、今のターデイスは時間軸
に縛られているから」

「やっぱりそう都合よくはいかないですね。」

と不比等を運び終え、俺はターデイスに戻ってきた。

「はあ、今回は少し重かったな……………」

ギューーン！ギューーン！

俺は知らなかったが輝夜は不比等に蓬萊の薬を渡していたようだ。

「で、なぜあなたがここに？」

今俺は富士山の山頂付近で妹紅と会っている。妹紅は富士山へ蓬萊の薬を捨てに行く途中で薬を奪い飲んだらしかった。その証拠に黒だった髪が白くなってしまっている。

「いや、君がここに来るのは決まっていることだからな。君に会いに来たんだ。」

「なぜ来たのか聞いてるんですけど」

「一緒に来ないか？一人で旅するのも暇なんだ。」

「うーん、どうしましょうか。」

悩んでるようだな、だって自分の目的とは関係ないからな

「嫌ならいいぞ。一ついいことがあるのなら、お菓子が食べられる。」

「行きます!!!」
即答!?

く!

次回に続

竹取の終わり（後書き）

見ていただきありがとうございます。今回で一応輝夜編は終了です。これからは東方の世界と次で行く世界が中心に話が展開していきます。

予告（変更あるかも）

「さあ、すべての歴史とすべての世界、どれから見たい？」

世界をめぐる

「初めは一つの星で生まれ、たちまち銀河中に広まった。これはその並行世界バージョンってわけだ。」

時間をめぐる。

「円卓の騎士も頭が固いな。もう少し柔軟な発想ができないのか」

歴史を

「俺？俺はドクターだ。」

世界をその目で

「ようこそ！此处が余の『黄金劇場』だ！」

見届けろ。

次回「黄金劇場」でお会いいたしましょう。そして感想よろしくお願いします。

黄金劇場

今俺は妹紅を連れてターデイスまで来ている。

「此处が、ターデイス、見かけよりも中が広い。」

「そういうことはすべて知っていますから」

「そうか……」

「シヨボーンとしないでください。」

「さあ、すべての歴史とすべての世界、どれから見たい？」
と俺はコンソールを弄りながらに言う。

「まあ、残念ながらこの世界はダメだけだな。」
この世界には少し居過ぎた。たまには違う世界に行くのも悪くはないだろう。

「じゃあ、初めは過去に行ってみたいです。」

「どのくらい？」

「100年ぐらい？」

と妹紅が言つと俺はターデイスを操作し100年前へと移動する。

「ここが君の世界じゃないが君のいた時代の100年前だ。だが、つまらないぜ。もっと行こう！」

とさつきよりも時間を戻る。

ギューーン！ギューーン！

「ここは？」

妹紅が聞いてくるので

「此処は君がいたところから考えてざっと700年と少し前かな？でも、外に出る前に君の服をどうにかしようぜ。」

今の妹紅の服装は富士山に登っていたためボロボロだ。

「でも、服はどこに？」

てなわけで妹紅は着替えた。服装に関しては特に興味はないのでわからないが、似合っている。俺も服変えようかな……ずっとスーツにコートもなあ……

「妹紅、少し待っててくれるか？」

「別にいいですけど……なぜです？私はもう着替えましたよ？」

「いや、俺が着替えるんだ。」

「正直、前の方が似合っていましたよ。」
今回の服装は11代目ドクターの物だ。いや、自分でもわかってたけどね……

「いや、これが似合っていないというわけじゃないんです。前が極端に似合っていただけで。」
なら、いいや

「じゃあ、今回はこれで行くとしよう。」

ガチャリ

「古代ローマ帝国にようこそ！」

「ろーまってどこですか？」
おい、そこからか

「ローマと言うのはだな。うゝん君の住んでいたところから西に一万キロぐらい行ったところかな。」

「一万キロってどのくらい」とりあえず遠くだ。実際日本人が行くのは君の時代から数百年後だ。」
ローマへはキリスト教の視察団が最初かな？

「ここがコロッセオだ。」
俺たち二人はターデイスから離れて今でいうローマ市内を歩いている。

「大きいですね！中に入れるんですか？」
中に入りたいのか？

「入れるが今日はそれよりも見るべきものがある。」

「え~~~~」

文句を言うな、文句を

「そう言うな。これに匹敵するものがある。さあ、行こう！」
と妹紅の手を引いて歩き出す。

「妹紅、見えるか？そこに人がたくさん入って行っているところがあるだろう？そこだ。」

と俺は少し遠くに見えるそれを指をさしながら言う。

「そこにいたい何が有るんです？」
訊いてくるが

「行けばわかるさ。」
と答えずに歩き出す。

そつしてたどり着いた劇場に入り席へと向かう。

「凄いですね！！周りが黄金ですよ！！」

「ああ、ここの名前自体が「黄金劇場」《ドムス・アウレア》って

言うぐらいだからな。」

これ自体は現代には残ってはいないが……

「で、ここで何をやるんですか？」

と俺と妹紅は席に座り話し続ける。

「ここじゃあ、このローマ帝国の皇帝が今日独唱会を開く、………

………面白いかは知らないけど」

「今最後に一番重要なこと言いましたよね！ちよつと」

「あ、これ4時間はあるから」

と無駄話をしているうちに舞台の緞帳が上がった。

そこには赤い服装をした少女？《皇帝》がいた。

『ようこそ！此処が余の『黄金劇場』だ！』

その皇帝は舞台の中心、照明に照らされながらに喋る。

『~~~~~』

俺の主観からすればとても面白いのだが………

「うーん、つまんないですね〜」

普通の人から見ると面白くないのか？

まあ、周りの反応からしても受けが悪そうだな。こんなに面白いの

に……

「もう、こんなの見られるか!!」

とついに痺れを切らした観客の一人が立ち上がり、それにつられて周りの観客も立ち上がり出て行こうとする。

『ま、待て!!』

皇帝が大きな声で言うが周りの騒音にかき消される。

「いいんですか？ドクターはこの劇楽しく見ていたんじゃない？」

と聞いてくる。無論だ。だから、こんなところでは終わらせない。

「もちろん、せっかく来たんだから最後まで見ていかないとない！」
& saying ソニックドライバーを取り出し上へと向け作動させる。

ガタン

という音が響いたと思うと次々と劇場の外へとつながる扉が閉ま
っていく

「どうなってやがる!!」

観客が言うが一向に扉は開かない。

『静まれえい！皆一度席に戻れ!』

皇帝の一声で観客は渋々と言った感じで席へと戻っていく。

「これで最後まで見れそうですね。」

妹紅が言う。

「ああ。最後まで見ないと何のために来たのかわかったもんじゃない

「いだらろ？」
「というと妹紅は笑う。」

てなわけで劇は無事に終了した。すべてで4時間半という長さだったが俺は楽しめたので来た甲斐があったぜ。

「じゃあ、妹紅後はローマを見学でもしようか。」

「ええ」その妙な服を着た男と美少女、待たれよ。」
ともう人の少なくなつた劇場に声が響く。

皇帝に呼ばれたので舞台まで行つた。

「そなたであろう。扉を閉めたのは」
おい、何でばれてんだ。

「そんな面妖な身なりをしておつて、あの騒々しい中席を立たなかつたのはそなた達だけだからな。」

「では、正直に言いましょ。私が扉を閉めさせていただきました。なぜならこれほど素晴らしい劇を俺は見たことがない！実にファンタスティックだ。」

もう敬語使うのやゝめた。

「当たり前であろう。余は楽神アポロンに匹敵する芸術家なのだからな！」

と自慢げに胸を張り答えてくる。

「だが、その前に、その美少女!」

と急に皇帝が妹紅に抱きつくこうとする。

「うひゃあ!!!」

と妹紅が飛びのき、皇帝を避ける。

「なぜ、余を避けるのだ。美しいものに嫌われるのは辛いぞ………」

「す、少しなら……」

というとき皇帝は急に元気になった。

「そう!そなた達に褒美をやるう!この劇が崩壊しなかったのもそなたのおかげだ。」

そう、妹紅に抱きつきながら言う。そうだなあ!じゃあ……

「じゃあ、今日の劇の台本をいただけますか?」

そういうとき皇帝は一瞬目を大きく開き、そのあと納得したようにしやべり始める。

「もつと金やら名誉を欲しがるものだと思ったが、やはりそなたはおもしろいな!では台本をやるう。だが、少し汚いがよいか?」

本人が使っていた証明にもなるしいいだろ。

「ああ、そのまま頼む。」

数分後皇帝は台本を持って走ってきた。なんで?

「そろそろ余は宮殿にもどらなければならぬ。最後に一つ聞かせてはもらえぬか？」

「ん？なんだ？」

「そなたたちの名前を」

ああ、言っていなかったか？

「俺？俺はドクターだ。」

「私は藤原妹紅です。」

そう二人で名乗る。

「ではな、ドクターに妹紅、最後に余の名前はネロ・クラウディウス、第5代帝政ローマ皇帝だ！」

大きな皇帝の声は華やかな劇場に響き渡った……………

次回に

続く！

黄金劇場（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

ここから少し今までは違い基本的に一話完結の話が増えます。

これは次やそのあとの長い話につなげるための話ですのでそう思っ
て見ていただければ幸いです。

では、感想よろしく願います。

無限書庫（前書き）

メリークリスマス！では、お楽しみください！

無限書庫

俺と妹紅は皇帝ネロと別れたあとターデイスへと戻り、次に行く場所の話をしていた。

「過去は見せた。次は未来だ！」
と俺はコンソールを弄り始める。あ、ちなみに服装はそのままだぜ！

「今度はどこに行くんですか？」
訊いてくる。

「あ、その前にそのレバーを下におろしてくれ。」

「は、はいわかりました。で、どこに行くんですか？」

「次か？その前に一つ、妹紅は本を読むのは好きか？」
これは訊いておかないと

「え？読むのは好きですけど……それがどうかしたんですか？」
それが重要なんだよね。

「っさ、行くぜ。」
と言いターデイスを作動させる。

ギューーン！ギューーン！

「次に行くのは、未来そして別の星だ。そこには全世界でも有数の図書館がある。」

まあ、知ってるだけで行っただことないからわからないけど。

と、話していると作動音が止まり、着いたようだ。

「まあ、見てみた方が早いさ。」

と俺はドアまで走り、ドアを開け妹紅に出るように促す。

「わかりました。」

と妹紅は出ていく。それに続き俺も出ていく

「ここがミッドチルダにある次元世界すべての情報がそろってる『無限書庫』……だ？」

そこには膨大な数の本が……なかった。

「どこにも本なんてないじゃないですか!!」

妹紅が怒ってくるが、いやそんな訳がないんだがな……

見渡しても社長室のように机と机とすが置いてあり、そこには時空管理局無限書庫司書長と書かれたプレートが置いてある。

「ほら見ろ、妹紅。一応無限書庫にはついているようだぞ。……

……少し場所間違えたけど。」

ミスッた……

「聞こえてますよ。聞こえて。」

と二人で辺りを見回していると突然ドアの開く音がし

ガチャリ

「へ？」

そこには眼鏡をかけた二十代ぐらいの美青年がいた。

「あ、え〜とこういうものだ。」

と俺はすかさず内ポケットからサイキクペーパーを取り出し、司書長であるう青年に見せる。

「そんなもの必要ありませんよ。」

え？もしかして逮捕？それはめんどくさいんだが……

「別にドクター、あなたとは初対面というわけじゃないですからえ？でも、この世界に来たのは初めてのはずなんだが」

「ドクター？この人知ってるの？」

と妹紅はおどおどとした感じで聞いてくるが、俺に聞くな。

「いや、すまんが、どこで会った？」

まったく記憶にないが……

「あ！そつえば、あなたはまだ僕にあったことがなかったですね。」

僕が貴方にあつたのは昔でもあなたにとって未来の話ですからね。
「え？なにそれこわい……」

「俺といつあつたんだ？」
俺とユーノは一緒に司書長室で紅茶を飲みながら話している。妹紅はどうしたのかって？ユーノに頼んで無限書庫の案内を付けてもらって今頃見学しているんだろうな。

「ドクター、貴方と会つたのは、と言っても未来のあなたに「過去の自分にはあまり未来のことは教えるな」って言われているんで詳しくは言えませんが、これを見ていただければ」
とユーノが取り出したのは一枚の写真、そこには、ターデイスに背中を預けている俺とその周りに集まるユーノに、え？と？

「これはなのはにフェイト、それにアルフ他は、会ってみればわかりますよ。」
え？会ってみれば………って？

「あなたにとつての未来で……そして、僕たちにとつての過去で。」

「ま、未来は知らない方がいいし、それにすべてがわかつちゃ面白い。旅している理由がなくなつたてしまうからな。」
歴史そして世界を自分の目で確かめることだからな。この旅の目的とでも言えるものは……

「未来のあなたも同じことを言っていましたよ。やっぱり、貴方は過去でも未来でも変わらないんですね。」
とユーノは楽しげに笑う。

「それと一つ頼みたいんだが……」

そして、俺はユーノに頼んで無限書庫を案内してもらっている。広すぎるな……ターデイスの図書室に匹敵するぞ。

「此处が無限書庫のメインですよ。」

「広いな。」

「ええ、そりゃあ大きいですよ。すべての次元世界の本や資料が収められているんですから。」
とユーノが自慢げに解説する。

「それでも、すべての世界じゃないのか……」
なのは世界だけのものだからな。

「前に会ったときに聞きそびれたんですが、その世界がどうかって次元世界じゃないんですか？」
とユーノが訊いてくるので解説してやろう。

「じゃあ、解説してやろう。その前にホワイトボードないかな？」

「すまないな。では、解説しよう。」

ユーノにホワイトボードを用意してもらい図を書いていく。

「此処の世界は大きな世界だ。まあ仮に大きな世界をA世界としよう。」

この世界はAという世界の中に存在する小さな世界の一つだ。

普通の世界は小さな世界が単体で存在しているが此処の世界は違う、大きな世界に包まれてる。

そして、一つ一つの世界を隔てる壁も非常に薄い。普通の世界と世界なら俺の船や裂け目を使わないと移動できないが

此処は大量のエネルギーを使えばその壁の向こうへと移動できる。俺が言ってる世界はこの包まれた世界群ではなく小さな世界をさしてる。」

「え？でも、それなら世界Aの外にも世界は広がってる？」

「ああ、それこそ無限の世界だ。此処の次元世界は限りがあるが、外には文字道理無限と同義だ。」

「僕たちじゃAの外に出るのは不可能なの？」

「別に不可能じゃないが、うーん、此処の技術、そして、此処には

魔力があるからあと500年ぐらいあれば越えられるんじゃないか？」

「500年………長すぎなの………」
ちよつと待て、君は………」

「なのは、どこから来たんだよ。」
とユーノは呆れた感じで言う。

「ドクター！ひさしぶり！」

「なのは、このドクターはまだ僕たちに会う前のドクターだよ。だから、久しぶりじゃなくてはじめてましての方が正しいよ。」
ユーノがなのはに言う。

「初めまして、高町なのはです。よろしくって言っても私にとっては小さなときからの知り合いなんだけどね。」

「初めまして、俺はドクター。まあ、そちらは知っているようだがな。」

俺とユーノたちは司書長室に戻り、ターデイスの前で話している。

「妹紅、そろそろ行くぞ。」
見学から帰ってきて、自分の背丈ほどもある本を持ってきた妹紅だった。

「それに妹紅、それ借りれないぞ。俺たちは、文字道理この世界出身じゃないんだしな。」
さすがにな。

「ドクター？別に借りていてもいいですよ？特に重要な本もありませんし」

ユーノが妹紅の姿を見て言う。

「あ、ユーノ、少し待ってろ。」
と言いつターデイスの中に入る。

「な、なにを、」

「はい、これを」
と俺はユーノへ一冊の本を手渡す。

「これは？」

「これは、ターデイスの図書室にあったロストログアがまとめてある本だ。君にピッタリだろ？」

と俺はターデイスに指をさしながらに言う。

「でも、なぜ？ターデイスに図書室があるのならここに来る必要なんてないんじゃない？」
と当然の疑問を聞いてくる。

「広すぎて迷うんだ。」

というところとなのはは笑い出す。

「笑いごとじゃないぞ。旅を始めたころ、そこで迷って三日間遭難したんだ。」

というところさらに笑い出す。

「おまえらな！いいや、妹紅、じゃあ行くぞ」と俺はターデイスの中に入る。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。」

と本を抱えたまま妹紅もターデイスへと入る。

「じゃあ、また未来で会おう！」

とドアを少し開け、二人に向けて話す。

「僕たちにとっては過去ですけどね。」

ユーノが言う。

「じゃー！ー！」

ガチャリ

ドアを閉めると同時にターデイスが光を発し、独特の作動音を響かせ消えていく

「行っちゃったね。」

「うん。でも、また会えるよ。」

「そうだね。」

次回に続く！

無限書庫（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。今回は未来への布石ですね。ところで、クリスマスイブにユーノやなのはの設定を見ながら小説書いてるって何か間違っている気がします。では、感想よろしくお願いします。

未来のコンパニオン（前書き）

少し短くなっています。では、ご覧ください。

未来のコンパニオン

今ターデイスは妹紅の世界の宇宙を漂っている。

ターデイス内部

「今はどこなんですか？」

妹紅がターデイスの椅子に座り、本を読みながら訊いてくる。

俺はターデイスのドアを開けて外の様子を確認する。

「えーと、少し待ってくれ……………わかったぞ。妹紅少し読むのをやめてこっちへ来い。」

そういうと妹紅はコンソールの上に本を置き、ドアの方まで歩いてくる。

「さあ、見てごらん！」

と勢いよくドアを開ける。

そこには一面の星、見えているすべてが星で埋め尽くされている。

「此処があのだの川の中心、今ちょうど天の川を突っ切ってる。」
と妹紅の手を掴んで妹紅を外へと放り出す。

「え、え、ちよつと~~~~」

「大丈夫、俺の手を話さなければ息もできるし、さあ、星を見よう！」

と5分ぐらい星を眺め過ごし、ターデイスの中へと戻った。

「でも、こんなところに来て何をするつもりなんですか？」

「別に来たくて来たわけじゃない。たまたま着いた場所が此処だったっただけだ。」

という妹紅は驚いた顔をし

「じゃあ、太陽に突っ込んでいたかもしれないんですか!？」

「いや、そんな場所はターデイスがいやがっていけないさ。」

「これって舟なんじゃ？」

「これは舟は船でも、生きてるんだ。そこらの船とは出来が違う。本物のドクターも育てると言ってたしな。」

「次はどこに行くんですか？」

「君の居た世界のある場所に行く。まあ、帰宅ってところかな？」

「この船が家じゃないんですか？」
まあ、そうだけどね。

「そうだけど、行くのは変えるべき場所だよ。こことは違う。」
それに行くのは少し違う理由もあるしな、それは、後でわかるだろ。

ギューーン！ギューーン！

と時代に不相应な動作音が響き、あたりが光り輝く。

ガチャリ

「さ、着いた。君と出発してからちょうど四百年ぐらいじゃないかな？」

と先に外に出て見る。

「おっと、妹紅、出てこない方がいい。」

ガチャリ

無理矢理ターデイスのドアを閉める。

「ちょっと！何するんですか！！」

何か言ってるが無視だ。まずい……

「貴様、何者だ！それにこの箱は何だ！」
いつも道理…………… 囲まれちゃった…

「ははは、それは災難だったね。どくたー」
今俺は守矢神社の本殿の中で話している。

「笑い事じゃねえよ。諏訪子。」

大変だったんだぞ、ターデイスと一緒に神社の本殿まで運ばれて、
「不審者です！」なんて言われる始末だ。

ドン！ドン！

「何か青い箱から音がしてるけどいいのかい？」
神奈子が訊いてくる。

「あ！いっけね。妹紅を閉じ込めたままだった。」
と慌ててターデイスのドアを開ける。

ガチャリ

「ドクター！どういうことで……………す、か？」
妹紅は二人を見て固まってる。どうした？

「いや、この子の反応が普通だよ。普通神様なんてみえないもんだからね。」

懇切丁寧に神奈子が教えてくれた。

「そうなのか？」

諏訪子に聞いてみる。

「うん、どくたーがおかしいだけだよ。」
「おかしいってひどい……」

「おい、大丈夫か？」
と妹紅の目の前で手をかざす、すると

「あ、な、なんで神様が~~~~~」
あ、妹紅が倒れた。

「私この子を寝かしてくるね。」
と諏訪子が妹紅背負い歩いていく。

「で、ドクター？ここに来たのは何か用があるんだろ？」
神奈子、さすがに鋭いな。

「ああ、少しゆっくりしたかったのともう一つ、あの子を預かってほしい。」

「あの子か？妙な感じはしていたが、何か違うのか？」

「あの子は……不老不死だ。それに、自分の膨大な魔力にも気づいていない。このままじゃ誰かに利用されるだけだろ。だから、君たちに力の使い方、そして守ってやってほしいんだ。」

「ドクター、それはお前がやるべきじゃないのかい？あの子もお前になついていたようじゃないか。お前が守り、教えてやればいい、私や諏訪子なんか到底及ばないほどの知識をお前は持つてるんだから。」

そうもいかないんだよな……

「ところがそうもいかないんだ。俺を神力が何かで調べてみる。そうすればわかるさ。前あつたときには俺の能力はもつと強く、腕っぷしもたつたさ、でもそれが弱まつてる。能力の低下、それにともなつて戦闘力も大幅に減つてる。このままいけば能力は消え、ただの人間になつちまうさ。」

自分でも気づかなかつたがな……………

「でも……その知識があれば」
それでも神奈子は食い下がる。

「俺はドクターであつても、ドクターじゃないんだ。」

神奈子はこの時ドクターという、言葉には何か大きな意味が含まれていることを、神としての直観で感じた。

「……………引き受けよう。でも、ちゃんとお別れはしなよ。」
 と言ひ神奈子は本殿の奥へと消えていく。

「次の旅は荒れるぞ……………」

と俺は本殿から出て夜空を見上げながら誰に言つてもなく呟いた。

俺はターデイスで眠り、妹紅たちは本殿で過ごした。

そして…………

「妹紅、ここでお別れだ。後のことは心配しなくていい、二人、いや二柱がしっかりとやってくれるだろうから」

俺と妹紅、そして諏訪子と神奈子はターデイスの前で集まった。

「あなたは私の想像もできないものを見せてくれました。黄金でできた劇場、世界の本をすべて集めたような図書館、そして宇宙、私がいけませんか？何か悪いことでも？」
と訊いてくるが

「そうじゃない、そうじゃないんだ。」

「なぜ……………」

妹紅はうつむいてしまった。

「では、こうしよう。君が魔力や自分、自分の体を理解し、十分に使いこなせるようになったとき俺は迎えに来よう。だから、その時まで待ってくれるか？」

「で、でも私は死なない、あなたは死んでしまっんでしょ？」
あれ？言ってなかったっけ？

「いや？俺は後9回殺されないと死なないし、老化という意味なら不老だぞ？」

と聞くと妹紅は一瞬驚いた顔をし、笑顔になる。

「じゃあ、待ってます。でも早く来てくださいね。私もすぐにドクターの言ったことなんかこなしてしまいますから。」
と妹紅は笑顔で言う。

「じゃあ、諏訪子に神奈子、後は頼んだ。」

「頼まれた。」

「わかったよ。」

諏訪子……昨日居なかったのにわかるのか？

「またな。」

「はい、また会いましょう。」

と妹紅と言葉を交わしターデイスへと入る。

と同時にターデイスが消えていった……………

ターデイス内部

「あゝあ、また一人か……」
結局一人になるんだよな。

「妹紅はどんな本を読んだんだ？」
とコンソールの上に置きっぱなしになっている妹紅の読みかけの本の表紙を見る。

そこには、

『アーサー王と円卓の騎士』

次回に続く！

未来のコンパニオン（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

そろそろ80pt超えるんじゃないかと言ったところです。

他と比べてしまえば少ないかもしれませんがこれが自分の書いていく上でのモチベーションをものすごく上げてくれます。

これから数話連続した話に入ると思いますのでお楽しみいただければと思います。では、感想よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8398x/>

知られざる世界の旅人

2011年12月26日06時45分発行